

飛騨みやがわ考古民俗館 30 周年記念シンポジウム

「飛騨みやがわ考古民俗館の 歩みと新たな展望」講演等記録

司会：

それでは時間になりましたので、本日のシンポジウムを開催いたします。

本日は、飛騨みやがわ考古民俗館の歩みと新たな展望にご来場いただきまして誠にありがとうございます。これよりイベントを開催させていただきます。

初めに主催者を代表しまして、教育長の下出より開会のご挨拶を申し上げます。お願いします。

下出尚弘教育長：

皆様、おはようございます。本日は、飛騨発つながりづくりイノベーションの一環といたしまして、この飛騨みやがわ考古民俗館 30 周年記念シンポジウムを開催しましたところ、こんなにたくさんの方にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。

この後お話をいただきます先生方、宮川町の皆様、これまで飛騨みやがわ考古民俗館の活動の推進にご尽力いただきましてありがとうございます。本日も大変お世話になりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

また午後からは、まだこの会場には来ておりませんが、宮川小学校の児童が本当に頑張っているんですけれども、このみやがわ考古民俗館を拠点というか、活動場所にしながら、多様な多くの人と関わり、つながりながら、このふるさとを愛する心とこれから生きていく力を育てています。まさしくつながり、今日のテーマにもございますが、歩みと新たな展望を切り開く、そんな活動につながっていることを嬉しく思います。

今日、本当に盛りだくさんの会でございます、実りある会になることを確信しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

司会：

ありがとうございました。申し遅れましたが、本日司会を務めさせていただきます。飛騨市教育委員会文化振興課の保谷と申します。皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、文化振興課の三好より、本日のイベントの趣旨を説明させていただきます。よろしくお願いします。

三好清超学芸員：

ただいま紹介にあずかりました、飛騨市教育委員会文化振興課の三好清超と申します。飛騨みやがわ考古民俗館の担当をしています。今日の会の趣旨を 2 分で説明させていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

まずは飛騨みやがわ考古民俗館ですが、1995 年に完成して今年度で 30 年目を迎えるということで、今回は 30 周年記念シンポジウムとなっています。

民俗資料、考古資料、古民家の 3 施設からなるというのが特徴です。教育委員会の職員が掛け持ち担当をしていて、年間 30 日しか有人開館をしないんですが、無人開館を 120 日しているというのが大きい特徴です。それで、150 日を確保しています。宮川町内で収集発掘された考古資料、近年まで使われていた民俗資料を主に収蔵展示しています。飛騨地方の民俗文化を知ることができるというのが特徴で、民具は国の重要有形民俗文化財に指定されています。一方で、まず電話がありません。また、冬は雪で閉館しています。市役所から 27 キロ離れているということで、ちょっとデメリットもあります。

ただ、近年の利用状況ですが、これが飛騨市に合併してからの入館者数の推移です。合併した当時はお客さんがいっぱいいたんですが、途中から年間 100 人もいかないうらになってしまいます。平成 20 年代くらい。ただ、平成 30 年くらいを過ぎてから、奇跡的な V 字回復を入館者数がしているというのが大きな特徴です。

僕が常々思っているのは、入館者数が一定数いた時代と、増えて利用され始めた今、資料は変わっていないのに、何でなんだろうということです。また、ふるさと納税を通じてたくさんのご寄付もいただいています。だいたい今、8000 万円を超えるご寄付を、この館の茅葺民家のためにいただいています。

飛騨みやがわ考古民俗館が持つ資料の価値は変わっていないはずなんですけれども、資料を集めて

いた時と今とでは社会の環境が異なっているというのがおそらく大きな原因じゃないかと考えています。30 年を迎える今、これから継承いくために何が必要か、今日それを考える企画にしたいなと思っています。

個人的には、来館者数が増えたり応援したりする人が幸せになる場を博物館が築くことができると、飛騨みやがわ考古民俗館は継承されるんじゃないかというようなことを考えています。今日はそのきっかけにしたいなと思っていますので、よろしく願いいたします。説明は以上です。

司会：

ありがとうございます。それでは講演に移らせていただきます。

はじめに、「デジタル技術で地域へ・未来へつなぐ飛騨みやがわ考古民俗館」と題しまして、公立小松大学の野口淳様よりご講演いただきます。

野口様は考古学のご専門で、当館所蔵資料の 3D 化やバーチャル博物館の作成にご尽力いただいております。それではよろしく願いいたします。

デジタル技術で地域へ・未来へつなぐ飛騨みやがわ考古民俗館

野口淳氏（公立小松大学）

皆さんおはようございます。

本日はトップバッターということですが、私の話す内容だけ、後の皆さんと少しかけ離れていることもあるかと思います。できるだけ後につながるように、でも時間が限られていますので、簡潔にお話しさせていただきたいと思います。

私のスライドの方は、一部出典があるもの以外は基本的に著作権フリーなので、写真を撮るなりご自由にご利用いただければと思います。

最初に簡単に自己紹介させていただきます。保谷さんの方からもご案内いただきましたけれども、もともと考古学者です。日本と海外のことをやっていて、これは中米のグアテマラというところですね。映画好きな人はスターウォーズのロケ地だとかご存知かもしれません。こちらは今年の秋に行ったサウジアラビアの砂漠のところですね。なぜかそういう僻地的なところによく行っております。

もう 15 年ぐらい前に 3D 計測を始めまして、それがきっかけで、一つは所属している公立小松大学の本部では、中米で現地の人たちに 3D 計測を覚えてもらって、それを文化遺産保護に役立てるという仕事をしています。2020 年ごろから本格的に始めて、今年 5 年目に入ったので、いよいよ現地の人が指導者になるステージまで来ています。そんなことをやっています。

それから海外でいろいろ日本の 3D の文化遺産保護の話をさせていただいております。国内でもここ数年、きっかけはまさに飛騨みやがわ考古民俗館からなんですけれども、博物館のデジタル化 DX という取り組みをさせていただいたり、それから日本文化財保護協会という文化財関連の企業の団体でも文化財 DX 推進宣言ということで関わらせていただいたりしております。

ということで、ここまで聞くと、博物館にあるせつかくある大事な実物資料をデジタルにして、実物がいらなくなるような話になるんじゃないかということで、警戒されている方もいると思いますけれども、そうではありませんということで、この後説明をさせていただきます。

博物館とデジタル技術ということについて、少し簡単に背景を説明しておきます。先ほど三好さんが一時、来館者が減ってからまた持ち直している。展示資料が変わっていないけど、何が変わったんだろう。変わったことの一つが実はここにあります。世の中、皆さんほぼ全員スマートフォンを使われていますよね。日常的にインターネットで調べ物をしたり、SNS でやりとりをしたり、デジタルというのは身近になってきていますし、我々よりもずっと年下の子供の世代だと本当に日常の道具になっていると思います。

そういうことを背景にして、実は法律の面でも 2022 年に博物館法という、日本の博物館はこうある、こうしろという法律が改正されて、その中にデジタルアーカイブというのが博物館の業務に組み込まれました。さらにその中で、法律には書いてないんですけど、文化庁の方で博物館 DX というのを進めるべきだ、デジタルトランスフォーメーションを進めるべきだ。実は私もこの DX の方針を決めるときに委員に呼んでいただいて議論しているんですけど、そういうことをやるということが言われています。

DX とか言われてもピンとこない。デジタルアーカイブというのは、つまり今まで紙の台帳や目録になっていたものをデジタル化して、インターネット等でいつでも誰でも調べられるようになる。そうすることで利用が促進するということです。

実は日本では国立国会図書館が中心になって、ジャパンサーチという事業がすでに動いてきています。これももう数年前なんですけれども、全国のいろいろなバラバラなところにあるデジタルアーカイブを横断して検索できるというのがあります。これちなみに今、魚具というキーワードで検索すると、こういうのがずらーっと出てきます。所蔵館とか写真があるとかがいろんなものが出てきます。こうすることによっていろんな利用ができてきますよということがあります。

さらにデジタルはこういったアーカイブだけでなく、普及や発信というところにもすごい強みが出てきます。ちょっと音鳴ってますけど、これ私一番好きなオランダのアムステルダム美術館というところがやっているものなんですけれども、ここはまずとにかく美術館に全く縁のない人に届かせるためにTikTokをやっています。こういう動画で、これはレンブラントの絵を扱っているところをこういう動画にしてやると、音楽をつけるとですね、若者なんかがなんだこれ面白いぞって見る。そこからInstagram、そして本格的なデジタルアーカイブへ誘導するというような、そういう専門家がいます。SNSとかをやることで、博物館、美術館を知らなかった人が来てくれるようになるということが、デジタル技術を使う一番の特典ということですね。

それから最近、XRというゴーグルをかぶって、ものがあるように体験できるというのも普及してきています。これは宮川での毎年3D合宿の講師に来てくれている路上博物館さんが共同で開発しているものなんです。ゴーグルをかぶると、ものが手にとって見える、でも実物はないんです。これは実はゴーグルの中で見えている画面です。そうすると何がいいことがあるかというと、直に触ると壊れやすいものとか、そういうものも自分で自由に見て体験することができる。こういったことも普及されつつあります。

これが特別な機械とかなくても、実はお手元のスマートフォンでもできます。機種によっては対応しないんですけれども、もし試してみたい人がいたらですね、まず左上のやつは誰でも見えます。右側のやつはアプリをインストールしないと見えないんですけれども。

これで何が見えるかというと、ちょっと画面を切り替えます。こんな感じで、山田先生の横にですね、石川県小松市で出土した縄文土器を置いてあります。でも、会場を見てください。ないですね、ここには。これポチッと押すと、土器がくるくる回り出します。こういうことが専門の機材がなくても、もう皆さん普段使っているスマートフォンでもできる時代になってきている。なのでこういうものを活用して、いろんな人に博物館とその資料を知ってもらおうというのが、今の博物館DXということになります。

何かすごい複雑なシステムがありそうに思えますけれども、仕組みはとても簡単で、簡単と言ってもあんまり簡単じゃないんですけども。デジタルのデータを作って、例えば飛騨市なら市役所のサーバーとか、あるいはどこかのサービスをしているところにデータを上げると、それをインターネットを経由して、スマートフォンでもパソコンでもアクセスして、自由に見れるようになるということです。この利用がかつては写真とかを見るような、テキストとか画像レベルだったのが、今ではいろんな端末で使えるようになって、こういうゴーグルを使ったものなども使えるようになっていきます。基本的な仕組みはこのインターネットを通じて、デジタルの倉庫からデータを持ってくるというものになっています。

これを使うメリットは、今までの博物館の情報発信というのはどちらかというと、博物館とそこにある資料に最初から関心がある人向けだったんですね。展示、それから講演会、書籍などがあると、あれを見たい、あそこに行きたいという人が来るというものでした。

ですが実際には、ここに新しい手法を加えると何が起こるかということ、その背後にもっと大勢いる、博物館や美術館にほぼ興味がない人たちに、博物館とその資料以外の接点、TikTokで面白そうな動画が流れているとか、VRゴーグルで見るとゲームのようで楽しいとかの経験をしてもらった中で、100人いたらそのうちの1人でも、博物館に行ってみたいなという人を新たに獲得することができます。よく言われるアウトリーチですね。アウトリーチというのは、今届いているところの向こう側に手を届かせるという意味なので、そのためにこの新しい技術手法というのが有効だという話になってきております。

先ほどの三好さんのお話に戻りますけれども、実は飛騨みやがわ考古民俗館はですね、飛騨市の中にある小さな博物館というふうに思われていますが、この手の取り組みに日本国内では、かなり早くから取り組まれているということで、そのお話を少し紹介させていただきたいと思います。

きっかけは2020年でしたね。その前からも実はSNSとかYouTubeとかの配信をされていたのですが、2020年に何があったかと思い出すと、新型コロナウイルス感染症で学校も博物館もみんな閉じてしまう。飛騨みやがわ考古民俗館でも人が来れないなら、自分たちがその展示を、押し売りじゃないですけども、ネットを通じてみんなに見せようということで、YouTubeで展示室を配信するというので、今ここに三好さんとか後ろにいらっしゃる橋本さんとかで、映しながらというのをやったんですけども、やっぱり画面越しだと物があまりよく見えないから、コメント欄にも、『もっとよく見せてほしい』みたいなのが上がってきていました。

そこでその頃から3Dをやっていたので、三好さんにメッセージを送って、3Dにするとみんなよく見てもらえますよということを送ったら、すぐに来てください、教えてくださいと言われて。来たらなぜか市長と対談してください、対談はYouTubeで配信しますと言われて、お断りもできないので、上にあるような形で対談をしました。

事前に市長とご挨拶をしたら、市長も、この三好さんにしてこの市長だなと思ったんですが、私は対談の前にお話をする、話が見えちゃうからしめませんと言って、何の話をするか何も打ち当てしないままスタートしました。もうこれはなるようになれということで、じゃあせっかくだから三好さんや市の職員が3Dをするだけじゃなくて、一般の人も呼んでみんなで一緒にやりましょうという無茶ぶりをしたらですね、市長がそれはぜひやりましょう、ヒダスケ！でやって宮川の鮎をお土産にみんなで食べれるようにしましょうと言って、翌年にはもうすぐ3D合宿が始まったということになります。

合宿をやってみるとすごい楽しいですね、これ実際の合宿風景です。こんな博物館たぶん見たことないと思います。博物館の展示室の中で資料を出してみんなで写真を撮ったりですね、スキャンをしています。

ただし博物館の資料は、やっぱりそれなりに扱いの決まり事がたくさんあるので、これは市の学芸員の方が必ずついてやります。私と路上博物館の森さんという人が技術的な指導をします。というのでやって、しかも合宿なので夜は古川ファブカフェでみんなで議論をします。最後は鮎を、毎年市長からのお土産でいただいて、炭火で焼いて食べるということです。

これをやっていって何がどうなっているかというと、今全国の博物館がいろんなところから予算を取ってデジタルアーカイブを作っていますが、飛騨市はこの3D合宿を通じて参加者の人にデータを作ってもらことによって、そういう大きな予算獲得をせずに皆さんのお手伝いによって、今100点ぐらいの3Dデータが公開されています。

この博物館資料100点ぐらいのデータ公開というのは、世界的に見るとそんなに多くないんですけども、日本国内では実はずば抜けて多いです。匹敵するぐらいなのは福岡市さんとか、あと群馬県、栃木県とか、県とか政令指定都市と同じぐらいのことをやっている。これも1年に100個とかは無理なので、毎年20個ぐらいずつ、10人ぐらいの参加者が2個ぐらいずつやってくると、それでももう4年、5年やると100個になると。そういうことをコツコツとやっているということです。もちろん参加した人も博物館に触れて、資料に触れて、新しい技術を知れてうれしいということです。それでただ公開しているだけでなく、今ギガスクールということで、小学校中学校みんな1人1台端末持っていますので、これ市内の学校に持って行って授業をして。それと実物の本物の時とそれからデジタルデータと合わせて活用するということも進められています。

さらに今では、考古民俗館に行くとARの展示、解説もあります。外国語の対応ですね。今各地でインバウンド増えているので、いろんな多言語の表示してくださいというのがありますが、言語数を増やすと壁がもう説明板で埋まっちゃいます。これ、人の隣にありますけれども、現地にはこの看板はないです。スマートフォンでかざしてみると映っているというものになっています。こういったいろんなデジタル技術を活用することで、また展示が変わらないのに来館者が増えているという背景にあるんだろうなというふうに私としては思っているところです。

こういう取り組みを2020年頃からやり始めて、今では飛騨市、飛騨みやがわ考古民俗館は博物館業界ではこういった取り組みの最先端、トップランナーというふうに認識されていて、三好さんもあちこち呼ばれて講演をしたりしているところで、日本各地に展開ということになって、ありがたいことに私も関わっていたので、こんなことをやってみたいというお声掛けをいただいたりしています。

一つ目、これは長野県の長野市立更北中学校というところで、部活ですね。ものづくり部というところが長野市立博物館さんをお願いをして、子どもたちに3Dスキャンをして、昔の道具、昔の暮らしというのを実際に理解するようなことをやれないか。この話が上がってきたので、3Dスキャンの

スマートフォンアプリを作っている Niantic という会社さんに協力をお願いして、iPhone を 15 台ぐらい持ってきてもらって、展示室に入ってみんなでスキャンするというのをやりました。

そのときに今井しょうこさんという漫画家さんに取材してもらって、漫画を描いてもらうのと同時に、せっかくスキャンしたものをネットで見れるようにということで、書籍も作って自費出版で出しています。これは位置づけとしては、長野市立博物館では公式の図録があります。それとは別にサブの副読本的なものとして地元の中学生在が作ったものがあって、中学生ならではの切り口でいろいろ書いてもらっています。

これをやってみて面白かったのが、実はこの部活の生徒たち、博物館とか民具とかに関心がある子たちではないです。どちらかというと、動画を作りたいとか、そういうコンピューター系が好きな子たちなんです。

最初聞いてみたら、博物館は小学校のときに先生に連れられて行って以来、たぶん一度も来ていませんという感じです。展示室も 5 分いたらもう出ていっちゃいます。見ていないですね。でも 3D スキャンを始めると、展示の内容に関心があるのではなくて、まず 3D をきれいに作りたいということで長時間滞在してじっくりやるようになります。

次にですね、物の形によってスキャンの仕方が当然変わってくるんですよ。そうするとその物を見るようになる。形とか材質とか。そうすると今度は脇にある展示の解説キャプションを見るようになります。何時代とか何地区とか書いてあると、そこでようやく関心が物に移って、学芸員さんにこれ何ですかとか、これうちのじいちゃんところだとか、というふうになっていくんです。

このときにすごく気づいたのは、博物館は物があって説明があって、それを読んでから物を見て理解する場所だというふうにずっと教わってきたんですけども、それだと関心を持ってない子たちというのが大勢いて、そういうところを今まではキャッチできてなかったのかな。入り口を変えることでこんなに、最終的にはこのときは午前中からスタートして、お昼になったら大体みんな飽きてやめるかなと思ったら、結局 3 時ぐらいまでずっとやってました。それぞれでこんなもの、あんなものみたいなことをやるようになってきています。

これは今年の、もうつい先月ですね、相模原市立博物館というところでも、市のデジタルアーカイブにさらに市民からデータをとってもらって追加しようということで、イベントを開催しました。もう本当に幅広く、小学生から 70 代の方までということで参加しています。実はつい昨日の夜、嬉しいメールが博物館の学芸員さんから来ました。このイベントに参加した小学生が、その後、学校で、自分の学校で先生にすごく楽しかったということのを力説したらいいんです。そしたらその先生から学芸員さんに電話がかかってきて、うちの学校に来て出張でやってくださいという話になったと。ということで博物館が今広がり始めている、ということがあると思います。

これ日本史とか考古学のことじゃないから、そういうことはしませんって言っちゃうと、そこでストップなんですけれども。とにかく 3D 化と縄文土器をやりたいというのだったらいいい道もあったんだなということです。見えてきたのは、これデジタルとか 3D とか、新しい技術が重要のように見えるんですけども、そうではなくてもっと本質を掘り下げてみると、自分でスマートフォンを操作して、そして自分で結果が出てくるという体験ですね。体を動かして体験しているというところがすごく重要なんだなと。

逆に展示のケースとかパネルキャプションというのは受け身なんです。学芸員が書いたことを一方的に読まされるだけで。関心がないと、やっぱりもういいやって次へ行っちゃう。でも自分でスキャンしていると、成功するまで頑張りたいというところがすごく大きいんだなということです。

さらに飛騨市の合宿の参加者の中にはですね、公開されたデジタルアーカイブを見て、自分が 3D にしたデータの閲覧者の数が増えていくのが楽しくて、定期的に見ているという人もいらっしゃるそうです。だから博物館の資料がどこか遠くにあるものじゃなくて、自分ごとになってきているんです。

これまでの博物館は誰か、つまり学芸員の仕事を見るとか教えてもらうという受け身の場所だったんですけども、このデジタル技術が入ってくることによって、自分自身が積極的に関わるようになるという場に変わるんだなということです。

今まではですね、興味関心が先で、博物館に関心があるという人だけが訪問して、そこで体験をするという順番だった。これはガラッと入り口が変わっているんですね。とにかくまず参加体験してみて、その中で何かしらの気づきや学びを得た人が、あ、博物館面白い、これからまた行ってみようというような形に展開するという違いがあるんだと思います。

これはさっきの漫画家の今井しょうこさんに、端的なイラストを描いてくださいとリクエストした

ら、こんなのを描いてくれました。左側が従来の博物館、右側が新しい体験型の博物館です。

どっちが正しい、どっちが間違いということではなくて、ただこういう違いがあるんですよということです。すごいイラストを描いてくれてますよね。学芸員の前でみんな整列して話を聞いているんですけど、一番後ろの子はもうちょっとよそ見しちゃってます。実際に展示解説をしたことがある人は、よくわかっていると思うんですけど、一人じゃなくて、よそ見している子のほうが多いぐらいです。ですから、こういう展示室の中で自由にスキャンしていると、もうずっと興味が続くということです。ということで参加するということで、一方向受け身から双方向、積極的な参加に切り替わっていくんですよというのが、デジタル技術導入の一番のメリットなんじゃないかなというふうに考えているわけです。

その上で、こういったことを飛騨みやがわ考古民俗館では取り組んできているんですけど、日本全国には知名度がアップしているけれども、じゃあ宮川の皆さんにはこのことがちゃんと伝わっているんだろうか。宮川の皆さんにとってこのデジタルで様々な取り組みをしていることが、どのような意味があるのだろうか。それが次の課題ですよというお話を、実は三好さんともしていたところで、ちょうどこういう企画になったわけです。

そこで改めて今回の企画があって、この後登壇される先生の皆さんと意見を交換している中で、新たに私自身も気づいたことがありました。何かというと、特に考古資料ではなくて、民具、民族資料ですね。その位置が、位置づけ意義が大きく変わっている時代に、このデジタル、3D というのが大きな役割を果たすのではないかとということです。

これも今、小学校の単元の、社会科の単元の中で昔の暮らしというのがあるので、各地域博物館というのが必ずやる昔の暮らし、昔の道具店、もう行くとみんなびっくりします。ファミリーコンピュータとか、ダイヤル式の電話機とかが、昔の道具として置いてある。私にとっては昔じゃないですし、会場にいらっしゃる皆さん、もう半分以上の人が、昔じゃないよ。それは博物館じゃなくて、うちにまだあるよということなんだと思います。

実は民具とか民俗資料というのは、ちょっと前のそういうものなので、例えば 20 年前、30 年前は、当時者の人たちにとって、地域の人たちから見ると、全然昔の道具でもなんでもない。けれども、例えば都会からきた人から見ると、昔はこういうものを使っていたんだねという言い方をされる、そういうものだったのかと思います。それが地方でもどんどん生活が変わっていく中で、そうした、かつてはちょっと前までは、自分たちの暮らし、生活の道具だったものが、今歴史にどんどん変わるという、急速に変わる時期になっている。またもう変わってしまった民具になっている。

これよく考えると、歴史をやっている立場からするとすごく当たり前で、歴史って止まらないんですよ。私は昭和生まれで、大学は平成の初め頃なので、昭和平成世代です。だから、定点というのは平成の頭ぐらいで、そこから前がどんどん近い歴史、遠い歴史です。ところが私の子供は、もう平成後半生まれですし、その下はもう令和生まれが、小学校に上がっています。そうすると、一個ずつずれていくということになるわけです、世代としては。これがずっと繰り返していくと、そのさっき言った民具や民俗資料というのは、身近にある暮らし、あるいはちょっと前の暮らしのものだったとしても、どこかで必ず歴史になっていくし、そのスピードも早く変わったり、あるいは地域によっても変わり方が違ったりということになってくるんだと思います。

そういった中で、地域の博物館の役割って何だろうということを改めて考えてみると、その変わってしまったものを、あるいは変わりゆくものを残しておく、記録に留めておくことによって、その地域の文化や歴史の多様性というものを伝えるという役割というのが非常に大きいんじゃないか。最近、生物多様性というのが自然保護ですごい言われます。単に自然が残っているだけでなく、いろんな種類の植物や動物がいないと、その豊かさが分からないでしょうということ。で、博物館にちょっと前の、あるいは非常に古い 1 万年前のものがずっと並んでいるのは、今日の前にあるコンビニで何でも買える、インターネットで何でも調べられるとは違う暮らしや文化があるということを知ってもらえるようにするためということ。それがなくなってしまうと、もう本当に選択肢がなくて一つのことしか見えなくなってしまう。そういうものを残しておく、残しておくから、触れるとか、思い出せるとか、あるいは誰かに伝えることができる、博物館はそのための場所だというふうに考えるべきなんだろうということです。

そうすると、やらなければいけないということもおのずと見えてきます。これ今、三好さんたちと進め始めていることで、動画出るかな。

考古民俗館の民具の収蔵庫を丸ごと 3D に記録しています。収蔵庫というのは、通常どこに何があるという台帳を必ず作ります。棚のどこに何があります。でも一般の人が見ても、文字の羅列でよくわからないんですよね。そうしたら丸ごと見えるようにして、こんなものがこんなにある。どうしても展示室というのはスペースに制約があるので、すべてのものを出すことができないですから、そうしたらこんなにあるものはあって、何があるのかというのを丸ごと見せてしまったらいいんじゃないかということで進めています。

ただこの話題でちょっと課題になるのはですね、昨年ニュースであった奈良の奈良県立民俗博物館の問題。3D データにして現物を廃棄してしまえばいいという知事の発言がありました。でもこれちょっとそうじゃないよなど。なんでデジタルにしたら実物を捨てていいのかとか、あるいは実物があればデジタル、3D はなくてもいいのかという意見も反対に出てくるんです。そういうことではないんだろうなということです。

昨日も登壇している皆さんといろいろお話をしている中で出てきたのは、結局実物のものがあっても、その絵が、どこでいつ採集されたのかとか、どう使われていたのかという情報がないと全く価値がなくなってしまう。デジタルも同じですし、実物もそれは同じです。それを両方組み合わせさせてきちんとやっていくということが必要なんだろうなということになります。

ということで博物館の基本的な目的としては記録、保管、そしてそれを公開して、体験ってありますけど活用ですね。特に今回冒頭に説明した通り、それを体験型の活用にすることがとても意義があるんじゃないかというふうに考えているわけです。これリアルでもできるしデジタルでもできます。リアルとデジタルが組み合わせると、より効果的なことができます。特に民具に関しては保存状態なんかの関係で、動かすということが難しいものがたくさん出てきてしまいます。特に時間が経てば経つほど動かすと壊れてしまうとか、替えが効かないみたいなこともあります。そういう動きを再現するのにデジタルのデータというのは非常に有効です。

これは 3D じゃなくてもいいんですよね。動画でもいいですし、アニメーションのようなものでもいいです。そういったことができます。あるいは民具だけじゃなくて広報資料もそうなんですけれども、展示室にあるものっていうのは、例えば組み立てたら組み立てた状態しか見せられません。バラバラにしちゃうと、今度はバラバラになった状態です。

デジタルデータはこれを自由に行き来することができるというようなこともあります。こういうのを組み合わせると、より良く使えるんじゃないかということです。その上で、地域の中における資料というのが、どうしても特に博物館や学芸員の人たちは、残す、保管するということに着目をして、とにかくなくなってしまうたら何もできないから、残す保管する。ところが、そうではなくて、その博物館のある地域の人や、あるいは博物館に来る利用者からしてみるとですね、もっとたくさん必要なことがある。探すことができる。調べることができる。触れる。体験できる。それを通じて何か考えることができる。そうすると、これが何であるかということを深く知って大事にしようという気持ちが生まれて、伝える、残すということをしようということになる。あるいは、それを支援してくれるようになる。

どうしても残す保管するだけに偏ってしまうと、こういったことが欠けてきてしまって、地域の中での博物館や資料の重要性というのが、理解されなくなってしまうんだろうなと。その時に、新しい技術でこれを補っていくことができるだろうというのが、今の私の考えです。

その上で、宮川が一番いい点はですね、既に考古民俗館があって、収蔵資料があるということです。先ほど、デジタルと実物を組み合わせ活用できると言いましたが、逆に実物がないところからはスタートできない。これが既にあるということで、これができるということで、ここからはもう最後になりますけれども、我々の課題としては、次にこれをどこへ、誰へ、何へ繋げていくのかということで、これまではどちらかというと、飛騨市の外側に向けて発信するというのを進めてきたんですけども、今日の 30 周年のこのシンポジウムをきっかけに、地区の皆さん、あるいは市内の皆さんに繋げていく、そのための入り口として、新しい技術などを活用していくという方法を皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。私のほうからは以上になります。どうもご清聴ありがとうございました。

【拍手】

司会：

野口様、ありがとうございました。

続きまして、旧吉城郡宮川村の埋蔵文化財調査と飛騨みやがわ考古民俗館と題しまして、関高等学校の林直樹様よりご講演いただきます。

林様は宮川村時代に発掘調査を担当され、飛騨みやがわ考古民俗館の設立にご尽力されました。また、今年度には考古学会で有名な藤森栄一賞を受賞されています。それでは林様、よろしくお願いいたします。

旧吉城郡宮川村の埋蔵文化財調査と飛騨みやがわ考古民俗館

林直樹氏（関高等学校）

こんにちは。関高等学校の林と申します。ただいまご紹介に預かりました。かつて、この宮川に勤めておりました。考古民俗館の開館に関わっておりますので、今の野口さんのお話もそうでしたが、どう未来につないでいくかというお話をさせていただきます。

簡単に自己紹介なんですが、大学を卒業してすぐに岐阜県の公立高校に勤務することになりました。私も岐阜県出身です。そして、教員になって5年ほど経って、大学で考古学をやっていたという関係もありまして、吉城郡宮川村というところに行ってこいと、そこで埋蔵文化財調査をしてこいと、2年で帰ってこいと、こう言われました。そうかと思って、ここに来たわけですが、7年間、2年が7年間ということで、大変充実した毎日を過ごしておりました。

それからまた学校に戻ったんですが、今度3年ほど県の方の埋蔵文化財の仕事をしてこいと言われ、2年ほど大垣市の今の東海環状線ですね、あの調査の関係で2年ほど県におり、そして関高等学校に転職ということになったんですが、ここで退職をして、今再任用で3年目です。都合関高校に17年。実は母校ですので、20年、人生の3分の1ぐらい母校で過ごしているわけなんですが、地域研究部という郷土史を研究するクラブ活動の顧問をここ数年やっております。あと最近、小中高で探究的な学びというのが盛んになってきておりまして、その担当をしております。

宮川村教育委員会の頃のお話なんですが、皆さんの目の前を通っております国道360号バイパス工事、これに伴って、堂ノ前遺跡、家ノ下遺跡、宮ノ前遺跡、この3つの調査、それと村独自の開発に伴う、主は金清神社遺跡、まさに考古館のある、近くの遺跡なんですが、この調査をやっております。おおむね旧石器時代から縄文、特にメインは縄文の調査でした。

当初の予想を超えた出土量、それから調査成果がございまして、当時新聞やテレビでも随分と話題になりまして、そんなこともあって、出土文化財管理センターを建設しようというふうに村が決断されました。

今でも覚えているんですが、そこに思い出食堂という食堂があったんですね。毎日そこでお昼ご飯を食べていたんですが、当時の村長さんからコピーを渡されて、文化庁がこういう補助金をやっているんで研究してくれと。はい、ということで教育委員会へ持ち帰り、県の担当に連絡をしたところ、県もまだ状況を把握していないという中で、出土文化財管理センター、埋蔵文化財の出土品を管理する収蔵庫、ただその収蔵庫の活用として展示コーナーを作っても良いということで、これが実は考古民俗館の始まりとなっております。考古民俗館に先立ちまして、先ほど野口さんのスライドの中にも出てまいりましたが、郷土文化伝習館と国指定の民具の収蔵庫が、既に宮川の塩屋にございます。それから当時村が力を入れて、また別のところに漫画図書館というものを作っていて、温泉もあって大変話題をよんで人気もあったと。教育委員会の中で議論したことを今でも覚えているのですが、これはどちらに作るべきかという話の中で、最終的にはやっぱり文化施設で、民具と考古資料では時代だとか違うけれども、これは宮川村の文化財ということで、両方見ていただいて理解をしていただいた方がいいのではないかということで、郷土文化伝習館に併設した形で作ろうということになったんですね。

当時は塩屋の石棒、全国的にも非常に珍しい石棒を製作した遺跡ということで、破片も含めると1000点ということで、今三好さんが一生懸命石棒クラブを組織して、これが全国的に話題を呼んでいるわけですが、当時も結構な話題でして、最初は我々も宮川の特徴である石棒をメインにした展示にしようということで、実は動きが進んでいました。今日来ていらっしゃる教育委員会事務局の方々とも、そんな話で進めていて、全国に行くという自分のところの特徴を全面に出している博物館ってあるんですね。例えば群馬県には耳飾り館というのがあって、2回ほど行っていろいろお話を受けて、じゃあ我々も石棒館に行こうと。ただ展示するだけじゃなくて、石棒の調査研究を発信する機関として、そういう宮川が役割を担ったらどうだという非常に前向きな話になっていたんですが、ちょっと様子が変わってきたのは、宮ノ前遺跡の調査なんですね。

旧石器時代の終わりから縄文にかけての移行期の非常に良好な資料、しかも植物や昆虫の依存体が出てきて、当時の環境変化が追えるということで、これも話題になりました。これは本当にある意味石棒以上に話題になって、当時新聞やテレビでも報道していただいたんですが、もう一度、教育委員会の事務局、それから私も役場の会議や議会の方にもお邪魔した記憶がございます。そんな色んな意

見を擦り合わせていく中で、やっぱり一つの村の資料で、1 万年以上の時代を、変遷を追っていきって、これはすごいことなんだろうと、一大パノラマなんじゃないかという意見が強く、もちろん石棒も展示をするんですけど、こちらだろうというような話が出てきたことを覚えております。この郷土文化伝習館や民具資料、出土文化財管理センター、それから中村家の住宅ですね、これを一括管理する施設をつくろうということで、これも今はなくなった役場の和室ですね、事務局の方々という候補を出して、最終的に飛騨みやがわ考古民俗館と、当時の局長さんが最後、これにしようとおっしゃったことを覚えています。

先ほど申し上げました 1 万年以上の文化変遷が村の資料で追えるのと、それからいざ考古館を公開しますと、地域の人の一番人気はこのジオラマなんですね。さっきの野口さんの話じゃないんですけど、生活感があるというか、自分が住んでいるところなんですよ。ここは俺の家だとか、そういう話で、実は土器や石器ももちろん熱心にご覧いただくんですが、これがですね、すごく人気で。そこまで人気が出るとは思わなかったという、そんな感じですね。

それから、時代は違うんですけど、谷あいの山暮らしの中で先人が知恵を絞って生きているという点では、これは考古資料も民俗資料も一緒ということで、山暮らしの知恵を民具と考古遺物から考えていただく、そういう施設、これ実は僕が関高校の生徒を連れてきたときに三好さんが案内してくださっているところです。

その後ですね、今日後でまたお話させていただく、山田先生が都立大の学生さんや全国的な呼びかけをして、さまざまな研究者の方をお連れしていただいて、これが今となってはすごい蓄積なんです。一つ一つの民具を使った方に、直にどうやって使ったとか、当時の思い出を語っていただいて、それを丁寧に記録されている。まさにこれがさっき野口さんがおっしゃった価値ともつながってくると思うんですけど、使った方々の思い出、生活史が記録になっていると。これは稀有な資料じゃないかなと思っておりますし、残念ながら今となっては聞けないお話がたくさんございます。

ところがですね、さまざまな時代の波もあって一時休館していたんですが、近年三好さんの獅子奮迅といいますか、疾風迅雷といいますか、すごい活躍で、また新しい時代を迎えていると。そんな中で私も 2018 年以降、地域研究部という郷土の歴史、そういった部活を担当することになり、あとは探究活動で飛騨市の方にお邪魔することも出てきて、宮川のフィールドワークを何回かやっております。そんなこともちょっとご紹介をさせていただきます。

これは考古館で、当時 3D スキャンはできないわけですけども、アクリルを外していただいて、自分たちがぐるぐる回って土器をしっかりと観察するという機会を高校生にとってもらいました。この中で 2 人考古学専攻に行っております。1 人は今、漁師になったんですが、考古学からなぜ漁師になったのかちょっと不思議なんですけど、人それぞれの人生ですからね。これはさっきと同じ写真なんですけど、考古資料を見つ、民具資料を見て、山の生活というのをいろいろ考えるということなんですね。近くの大工さんのところに行って、樽へぎの体験もさせていただきました。実際に民俗館にあるものを使って、建築部材の一部を作るという。結構初心者がうまくやるので、私も驚いたんですが。

ところが、高校生の関心というのはどこへ行くのかよくわからないところがあって、結局彼らが民具と考古資料をぐるっと見た中で一番関心を抱いたのは、かつて戦前にここで考古学の研究をやっていた、江馬修さんという人、しかも彼が小説家であったというところでですね、なぜか関心がいきまして。その後、県の図書館に行ったりして一緒に調べたりするんですけど、これが面白いらしいんですよ。戦前の論文をずっと読んでいます、生徒は。帰るよと言うと、もうちょっと読みたいって、何に関心が出てくるかわからないので、いろんな機会があるといいなということを思いました。それをまとめて発表したところ、考古学協会以最優秀をいただいたということで、実は今週末も日本考古学協会へお邪魔して、また発表させていただきます。野口先生はご担当の一人です。よろしくお願いいたします。

それから、あとは、関高校は探究活動が盛んで、いろんなことを高校生が興味を持ってやるのを、教員が応援しようということで、何か変わったことをやる生徒が出てくるんですね。東山動物園の 5 頭のゴリラの関係を、信じられないんですが、お昼を挟んで、午前午後、ずっとゴリラを見ているんですよ。観察するんですよ。こいつとこいつがここで喧嘩したとか、喧嘩のきっかけはこれこれこういう出来事だったとか、雷が鳴って動揺して喧嘩をやめたとか、そのことをずっと記録していくんですね。これが楽しいらしいです。大丈夫か。今でもその時のメンバーで同窓会やっておりますね。私も呼ばれるんですが、一人今南極観測に行っております。変わったって言っちゃいけませんね。非常に好奇心の高い人たちの集団で面白かったんですね。これがずっと続いていたんですが、残念ながらコロナ感染症でできなくなった。でも何かやりたい。チンパンジーだったんですね。チンパンジーの

何をやり始めたかという、これは京都大学の動画がたくさん公開されているんですね。これ道具を使っているんです。これはギニアのボッソウという村で、ここだけなんです、もう一箇所あるんですが。そうみんなのチンパンジーがやるわけではないです。平べったい石の上に木の実を置いて割って食べるんですよ。石器を使うわけですね。この動画を見て、彼らは自分たちも割り始めるんですね。自分たちも割って、さらに小学生にもやらせる。またデータを取るのが好きなんです。比較観察するのが好きなんです。さっきのチンパンジーって、ペタッと座ってやるんですね。人間はやらせると前かがみになっているんですよ。何でこれ姿勢が違うんだとか、ごちゃごちゃ言い始めるんですね。あちこちでデータを取る。ついにはモンキーセンターにお邪魔して、チンパンジーの骨と人骨の比較を始めると。

そして、ついには京都大学の施設で、チンパンジーの石器の実測を。これはとある事情で、ちょっと机椅子が貸してもらえなかったんで、彼は今、実測をしているんですよ、チンパンジーの。生まれて初めての遺物実測が、チンパンジーの石器という、非常にレアな体験をさせてもらったんですが、これは実際にチンパンジーの石器なんですね。非常に興味深い点があります。

男子、女子いたんですが、男子部隊は石器の実測をして、女子部隊は宮川にやってきました。日本史の教科書に、摺り石と石皿というのが出て、先生、あれチンパンジーの石器に似てない？私たちが見たいと言い出して、いいところがあるよと。で、宮川に連れてきて、三好さんと、旧石器時代末期から縄文晩期に至るまでの、この平べったい石と丸い石の組み合わせですね。これをずっと調べて、これも張り付いて。ね、三好さん、1日、丸1日ですよ、やってるんですね。これを追って行って、ナツ割りから考える何百年の人類史って、なんかちょっと壮大なタイトルですが、これで三好さんの母校の奈良大学で学長賞をいただきました。いささか強引な結論だったんですが、まあ頑張ったなということですね。コロナになって、この野外の調査もちょっとできなくなって、宮川にも行っちゃいけないということになって、何にもできないじゃないかというときにですね、校庭にトチの木があるということに気がついたんですね。これをですね、拾って、あく抜きをしてみようということになりました。今、教科書にも書かれているんですね。縄文人はトチの実をあく抜きして利用していた。これやってみようということになって、これは意外にうまくあく抜きできたんですね。そして、コロナの最中ですね、野外に行ってもよしい、やめなさい、行ってよしいの繰り返しで、行ってよしいというときに、宮川の収蔵庫です。ここで、トチの実の民具の観察をさせていただきました。これ同時に、宮川、河合、古川で、古いトチの実利用の民具を知っている方々のもとを訪ねて、あちこち調査したんですね、郡上でも。ところが、これ不思議なもので、関市でも山間地でやってらして、実は私たち生徒と8カ所ぐらい調べたんですけど、この親子代々受け継がれた事例というのはなくて、ご近所とか親戚に教わって、ちょっと面白そうだからやってみたというのが今主流なんですね。マイナーサブシステムズと民俗学の人には言ってらっしゃるみたいですけど、楽しみの中でちょっとやっていくという。これ親子代々の事例が、実は関市に1例だけあって、残念ながらその方がお年で今やってらっしゃらないんですけど、いろんな調査の過程で貴重な体験をさせていただいています。これもですね、國學院大学のコンテストで表彰していただきました。

今も美濃加茂市や加茂郡の方で毎年里山聞き書きということで、おじいちゃんおばあちゃんの元を訪ねて、手作りのこんにゃくを食べさせてもらって、おいしいってこの子が言ったら、話をしてくれたこの女性が今度来なよって言って。これはこんにゃく作りに挑戦しているところですね。こういうことって生活の記録として重要です、異世代交流とか、あと地域間の交流ですね。一度三好さんにお話をいただいて、飛騨の方の高校生と関の高校生の交流会も飛騨市でやったんですが、あの時にね、なんで関の高校生が飛騨の研究をするんだって質問が来ましたよね。でも逆に、地域間の交流も生徒にとってすごく刺激になってありがたいと思っています。

今探究活動が始まっています。関高校も進学校で探究活動が始まった時に、あまり受験勉強に関係ないんじゃないかということで、そんなに高校生は乗ってこないんじゃないかなと思ってたんですが、非常に前向きに取り組んでくれる若者が多いですね。授業の中でバーチャルに、こんな街にしたいなというような研究をやるのがメインですが、実際にですね、街に飛び出して、街の人とマルシェをやったりとか、特産品の開発をやったりとか、あるいは街の人と意見交換してくるとか。実際に街に出る高校生が、2年生が一番活動メインなんです、大体4人に1人ぐらいはやってます。これはですね、実はここに大勢人がいますが、上の平べったいところ、あれは特攻飛行場の滑走路なんですね。今、本校の生徒が調べています。滑走路の下を通る暗渠の説明を今しているところなんです、現地で、歩け歩け大会のときにここでやって、現地の人に案内しているところですね。

それから、最近は小学校に出前講座に行ったりもします。やっぱりお兄ちゃん先生、お姉ちゃん先生が人気で、教室から帰ろうとしても、ねえねえと来るといような。今度また行くんですけども、

こうやって高校生が考えていくということを今、積極的にやっています。

ここからが宮川に話を戻すんですが、やっぱり宮川の特徴というか強みというのは、この自然と伝統的な部分が残っている暮らし、それからそこを振り返ることのできる考古民俗館、これがやっぱり宮川の魅力なんじゃないのかなと私は思います。これはさっきの高校生がですね、宮川の資料を見て、実際に樽へぎを体験するとかさせていただいたり、あるいはトチの実で、自分たちでトチの実を作って食べてみたり。最近モノ・コトなんて言われますが、コト消費とか、そういうものを生かした野外ミュージアムといいますか、そんなものが宮川ではできるんじゃないかなと思ってます。

今日私がですね、とても楽しみにしているのが、午後から宮川小の子たちに博物館ガイドのお話をさせていただけるということです。そういったこの宮川強みを生かした活動をやっていくのは、やっぱりいいんじゃないかなと思うところなんですけど、これやっぱり次の世代にどう繋いでいくかっていうことが大事で、関高校の地域研究部なんかの場合は、自分たちが体験したこととか考えたことを地域の人とシェアして、じゃあこの遺跡どうやって守っていけばいいんだとか、そういった会議もやったりします。実は野口先生にも来ていただきました。

そういう地域を巻き込む活動の、むしろ子どもや若者が真ん中に座ってといえますか、立ってといえますか、そんな地域になるといいのかなと思ったりもしております。

考古学をちょいちょいつまみながら教員生活をやっている立場ですので、そんな立場から考古館の昔をちょっと振り返りまして、さらにはですね、この30年を振り返りつつ、こんな方向で動けばいいなと思っていたところ、パンフレットで宮川小の子どもたちの活動を見て、これだなと思った次第です。私の拙い話はこれで終わります。ご清聴どうもありがとうございました。

【拍手】

司会：

林様ありがとうございました。

続きまして、“民具愛 “でまちづくりー福島県只見町の活動報告ーと題しまして、福島県只見町の新国勇様よりご講演いただきます。

新国様は、住民自らが民具を収集、整理し記録する只見方式により、愛着をもって民具整理を官民学連携で取り組まれております。それではよろしくお願いいたします。

“民具愛 “でまちづくりー福島県只見町の活動報告ー 新国勇氏（福島県只見町）

こんにち。福島県の南会津郡只見町というところからやってきました。飛騨市まで車で380キロほど運転してきたのですが、着いてみたら、只見とほとんど変わらない風景でした。そんな印象もあり、とても親しみがあります。

私は今、「ただみ・モノとくらしのミュージアム」という民俗博物館の運営協議会長という立場ですが、今日招かれている先生方と違って、一介の役場職員でした。研究者でもなく、只見町役場の職員をやっていて、その異動の中で教育委員会に行き、『只見町史』という自治体史をつくりました。この町史編さん事業の一環として民具整理をやったのです。最近、民具への住民の関心が薄れていること、収集した民具を廃棄したり、收藏できない民具をどうするかといった課題が全国的に起きているとき、只見町は意外とよくやっているという話が広がり、あちこち呼ばれて話しをさせてもらっています。今回も、いささかでもご参考になればという思いですすめさせていただきます。

まず、只見町の位置ですが、福島県の最西端にあつて新潟県との県境にある町です。飛騨市も福井県との県境にありますが、どちらも県境にあつて気象や植生も日本海型になっていますね。冬は丈余りの雪が降ります。今年は4メートルを突破しました。約半年間が雪のなかでの生活です。山は飛騨地方よりもっと急な山です。とんがった山々の峡谷に只見川が流れていて集落が点在しています。そのような風景は、飛騨市と似ています。只見川に沿ってJR只見線が走っていますが、景色がよく乗り鉄や撮り鉄がいっぱい来ます。

只見町の民具は、「雪と山と川」がテーマです。川漁をする用具、田畑での耕作用具、山に入って猟や伐採、山菜の採取をする用具といったものが多いです。現在までに收藏している民具は11,000点ぐらいです。その中で「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」2,333点が国指定重要有形民俗文化財として登録されています。山国での狩猟・漁撈・採取用具や山袴など自分で作った仕事着のコレクションです。特徴的なものに、つる細工用具があります。つるはマタタビのつるです。只見に

はタケがないので、マタタビつるを裂いてザルを編みます。アケビつるのザルも少々ありますが、ほとんどはマタタビ製です。コレクションの中心は、仕事着です。仕事着の布は会津若松の会津木綿とか新潟県加茂市の加茂綿を購入しますが、あとは地元で仕立てて着ていました。そのほか9,000点あまりの民具は、旧朝日公民館という昔の公民館をそのまま使って保管しています。

これは2022年にオープンした「ただみ・モノとくらしのミュージアム」です。ちょっと長い名前ですけど、モノというのは民具だけでなく土器から書籍や美術品までふくめた山国の人々のくらしをテーマにしています。手前はオープン展示室、右奥の大きな建物が収蔵庫です。左手の建物が展示室になっています。だから展示面積はかなり広いです。総工費は5億2,000万円です。今は非常勤館長1名と職員3名、その中に学芸員1名という体制で運営しています。企画展はミニ企画展が年2回、あとは本企画展が1回ほどやっていて、りっぱな図録も出しています。オープン展示室は、解説パネルをいっぱい貼りつけるのではなく、蓑笠を着て写真を撮ったり、つる細工ができるコーナーを作って、できるだけ楽しく体験できるものをめざしました。残り9,000点の民具ですが、もうぎっしりで入りきらないという状態になっています。ここも用途ごとにきれいに展示しています。

只見町での民具の収集は、60年前、3つの公民館が主体となって集めたことにはじまります。当時、農家住宅が壊されていたとき、このままではなくなってしまうという危機感から集めました。それが現在まで続いているのです。民具は旧分校や旧寄宿舎などにいっぱいあったのですが、それを本格的に整理してみようというのではじめてのが1990年です。そのころは明治や大正生まれのお年寄りがいっぱいいました。そんな人たちを集めて、とにかくお年寄り自身に整理のすべてをやってもらったのです。今だと、民具整理は学芸員だったり大学生が来てやってみたりというのが主流ですが、うちの場合は専門の者はいなくて、町民にやってもらいました。一番若い人で40代くらい。最高齢は90代。だいたい40人ちかくが集まりました。それ以降は、代々受け継がれて、第二世代、第三世代というふうになっていきます。いまは孫の世代になっています。整理に必要な機材やカメラは町で用意しましたが、計測、記入、写真貼り、カードの仕分けなどはすべて町民にやっていただきました。冬になると「子供や孫に伝えたい内容をなんでも書いてください」と言って、記録作業を重点的にやってもらいました。調査カードの表は、名前と使用方法を書くだけの簡単な様式となっていて、裏面に民具にまつわる思い出や伝えたいことを箇条書きにして書いていただきました。苦労した思い出とか田んぼや山での生活とかをカード一枚一枚に書き込んでもらったのです。使用方法も、使った経験のあるおじいちゃんやおばあちゃんが「こういうふうにして使ったんだよ」という形で自分から民具を手にして写真に撮り、使用風景を残してもらいました。また、書いた人の名前も文末に入れてもらいました。どの集落のだれが記録したのかがわかるからです。調査カードにすべての記録が入っていますから、これを見るとほとんどのことがわかるわけです。こんなふうにぎっしり書かかれたカードもあります。これって一次資料だと思います。学芸員の方が聞き書きして記録すれば二次資料ですけど、これは体験した人が自ら書いたのですから原資料、一次資料です。これが12,000枚くらいあります。ですからこのカードは膨大なデータ記録集という感じです。このように町民自らが整理して、写真も撮って、記録を残すという作業が「只見方式の民具整理」とよばれ全国的に知られるようになったのです。整理した民具は『図説会津只見の民具』という本にまとめました。これは民具整理をしていただいたおじいちゃんやおばあちゃんが使用風景を演じて出ている本なので、たいへん売れました。というのは、本に出ているおじいちゃんやおばあちゃんが孫とか親せきに配ったからです。1,000部刷ったのが1ヶ月で売り切れて、今では3刷りです。これが一番ヒットしました。この本で町民が民具に興味をもち引き込められたということは事実です。

そのあと、国の重要有形民俗文化財にしたらどうだという話が文化庁からありました。その時に民具整理をしたおじいちゃんやおばあちゃんや一般町民を集めて、「只見町民具と語る会」という団体を作って、国重要文化財指定に向けて民具整理をやろうということになりました。おじいちゃん、おばあちゃんたちは、さらにやる気をだして国重要文化財の指定に向けて奮闘していただきました。その活動を「民具保存活用運動」と名付けて作業を進めていきました。これらは意外にうまくいきました。「なんでそんなにうまくいったのですか？」という質問をよく受けます。これは当時、只見町史という自治体史を編さんしていたのですが、調査に訪れた民俗の先生方から「いや、これはすごいことをやっているね」とかほめてもらうわけです。ほかにもいろいろな研究者や大学生なんかも入ってきます。そういう人たちが、おじいちゃん、おばあちゃんのやっているところにやってきて、激励したり助言したりするものですから、民具整理している人たちのモチベーションは高まるわけです。整理をする町民と研究者が一体化したというのがよかったと思います。あとは、徹底した民具整理マニ

ジュアルを作りました。お年寄りにこれが終わったらつぎはこう、それが終わったらこうという形のビジュアルなマニュアルを提示しました。それから、やはり町からお金もいただきました。でも、これも活動しているから予算をつけてもらえるわけで、何をしているかわからない、もしくは町民に知られていないようでは予算なんてつきません。マスコミやテレビにもけっこう紹介されて、「あれだけやっているんだから」ということで補正予算を何回もつけてもらうことができました。この時期はバブル経済の時期だったのでいまより余裕はあったのかもしれませんが、それでもつねにアピールして啓蒙・啓発活動をやったという効果は大きかったと思っています。そして2003年に只見の民具が国の重要有形民俗文化財に登録されました。このときは祝賀会を盛大に開いて町民みんなでお祝いをしました。

民具を収集整理したあと、どのように活用していくのかということが一番むずかしい問題です。どう対処したらいいかという方法は、3つあげられます。1つ目は「知らせること」。広報紙上でも、公民館や学校のイベントでもどんな機会でもいいのですが、とにかく広く周知させるということが最低限必要なことです。2つ目は「体験させること」。学校や公民館でザルを作るなどの体験をさせることです。そして3つ目は「使わせること」です。これは「販売する」という形でもよいと思います。こうしないと、どうしてもただのモノになっちゃって愛着はわからないだろうと思います。「知らせる」「周知する」というのは、行政や博物館の役割だと思います。そして「体験をさせる」というのも、行政と博物館だと思います。これをしないと結局住民はついてこないですよ。住民は知って体験して、使うに至ります。火付け役は、行政や博物館でないとうまくいかないという気はします。

只見の民具はこれからどうしたらいいのかという話ですが、いま第三世代が民具整理しています。それらを進めて学術価値をいっそう高めようと思っています。その学術価値を住民や学校に知らせる、周知させるということです。それが住民の自信と誇りにつながる。誇りというのはちょっと鼻につくので、自信と愛着を深めるみたいな感じです。それがあれば、町の宝物はいつもあそこにあるよという認識が町民に広がっていくというのが一番の理想の形だと考えています。

民具を伝える、体験させることでは、只見町ではつる細工講座をおこなっています。小学校5、6年生の体験授業に、おじいちゃん、おばあちゃんがやって来て、何十年もやっています。さらに只見、朝日、明和公民館という3つの公民館でそれぞれつる細工教室をやっています。だいたい1公民館で10人から15人くらい集まります。マタビつるで編んだ細工品は、商品としても販売されています。2月に大きい規模の雪まつりがあるのですが、そこでは民芸品の販売コーナーもあります。マタビつる細工のザルやブローチとかスゲで編んだバッグとかいろいろあります。これは公民館主催の文化祭での成果発表のようすです。只見民芸品保存会、朝日またたびクラブ、明和民芸品保存会があり、結成されて40年以上たっています。こういう伝統が受け継がれて現在に至っていますが、いまはもっぱら奥さん方が多いです。昔は男ばかりだったのですが、今は奥さんの方が多いという感じです。

民具を活用することについてですが、只見町では最近急に仕事着が復活してきています。これはユッコギという山袴ですけども、仕立て直して試着しているところです。意外にこれが話題をよんでいます。仕立て方法がわからなくなっているのが、奥さんたちが集まって、古い袴をほどいて、そこから寸法を測り型紙を作って復元しました。これは去年の文化祭での発表のようすですが、昔の仕事着を現代風にアレンジして着ています。これは小学生の発表のようすです。右下は公民館での成果発表です。このようなユッコギ・ファッションショーというのが最近はやっています。今は古い着物がいっぱいありますから、着物の生地でこういう仕事着、日常着を作り、それらを着ることが最近増えています。明和縫子さんクラブという団体は、仕事着の壁掛け商品化しました。メーデルリーフという地元の会社は、仕事着の型紙を販売しています。そして普段着のように着ている若い女性も出てきました。このように仕事着が注目されるようになったのは、じいちゃん、ばあちゃんが着ていた古臭い着物という感じではなくて、国の重要文化財にもなっている仕事着という認識もあると思うんです。

只見町民がなぜ民具への愛着が深いのかを考えてみますと、約半年間、雪の中にこもってくらす山国で、交通も遮断状態ですから、昔ながらの生活スタイルをずっと維持しているという特殊な地域性があると思います。それに3世代、4世代の多世代同居ですから、おじいちゃん、おばあちゃんと同居しているという家がいっぱいあります。そういう形で、昔の伝統やくらしが受け継がれているということもあると思います。それと、マスコミによって只見方式の民具整理や民具保存活用運動などが報道され、全国から研究者や視察者がいっぱい来たのですが、そういう形でいろいろと評価されると、どうしてもその気になってきますよね。民具整理をしたおじいちゃんやおばあちゃんが、最後の

ころには使命感をもってやるようになりました。それは今も続いていると思っています。こういうことから民具に対する愛着が非常に深くなったのではないだろうかという気がします。

只見町は、民具整理がよく知られているのですが、過去のことを調べてみると、民具だけでなく、さまざまな学術調査を行って町を深掘りしながらまちづくりを進めてきていると改めて感じています。民具以外でも、1960年代から郷土をよく知ろうということで『郷土資料集』や『図説会津只見の歴史』を出版するなど文化の盛り上がりがありました。それは当時の振興計画にも反映されています。第1次只見町振興計画には郷土資料館を作ることが盛り込まれています。1989年からは只見町史編さん事業がはじまり、18年間で26冊の本を作りました。自然関係の学術調査もいっぱいやりました。これによって「只見っていうのはすごい自然があるよ」ということになり、白神山地以上のブナ林が残る世界遺産級の場所だということになりました。そして、日本の自然の中心地は只見という意味をこめて「自然首都・只見」宣言をしました。2009年には「只見町ブナセンター」が発足します。これはブナを核とする町づくりの拠点施設です。その後、原生的な自然と伝統的な生活を有することから「只見ユネスコエコパーク」に登録されます。あまり知名度はないのですが、内容的には世界自然遺産とほとんどおなじです。現在、ブナセンターには5人の職員がいます。そこにはユネスコエコパーク推進室があり、学術調査を積極的にやっています。年間250万円の予算を組んで助成事業もしています。1対象者に50万円を上限として只見町をフィールドにした学術調査をしてくださいという形でおこなっています。横浜国大とか新潟大とかの大学がいっぱい来ています。ただし、やるだけでなく、それを町民へ周知させるというアクションがたいせつです。「ただみ・モノとくらしのミュージアム」でも企画展やシンポジウムをさかんにやっています。ふつう自治体史は編さんが終わればそれっきりのことが多いのですが、只見町の場合は町史編さんが終わったあとに、このような発展的なことが続いています。

ここまでやることができたのは、民具整理をした、本を作った、というだけでなく、住民がどれだけ理解し受け入れてくれたのかということがキーワードだと思っています。講演会をする、観察会をする、広報誌に記事を連載するというアクション、働きかけをとにかくひんばんにやった成果ということです。たとえば、ここに持ってきた『只見とっておきの話』は、広報ただみで25年間連載したのをまとめた本です。私も書いていますが、ほとんどは只見に來られた研究者に無償で執筆をお願いしました。「只見で調査やデータの提供に便宜を図ったお返しになにか書いてください」とくどいて半年間の連載をしてもらったのです。この本は2冊にまとまり、各戸に配布されています。それから只見町史11冊のダイジェスト版ともいえる『只見学おもしろガイドブック』という本も作りました。1冊1000ページもある町史なんかそう見ませんが、小学生も読めるようにして、学校や各戸に配布して親しんでもらえるようにしました。このようなアフターケアというか長い働きかけがあってこそ、ここまでやってこられたというのが今の実感です。いろいろなアクションをしかけたことにより町民がその気になったというわけです。

只見町には道の駅はありません。山ばかりでなにもないって言われますけど、うちはハード投資ではなくて、いわゆるソフト投資をしてまちづくりをすすめている町です。学術調査というソフト投資がそうなのですが、地域資源を掘り下げて、その地域のなにがすばらしいのか、なにがたいせつなのかっていうことを追究した成果がいまの姿になったのではないかと思います。ですから、かんたんに見て遊ぶようなことは期待できないかもしれません。ただ、目的をもってやろうということであれば、かなり深いところまでやれるという町ではあると思います。

何回も同じことを言います。住民をその気にさせるのは、やはり発信することに尽きると思います。発信するっていうのは、マスコミ、今はネット、広報紙、とにかくいろいろな手段をつかって情報を伝えることがいちばんです。周知したつぎは、啓発です。シンポジウムもやる、フォーラムもやる、講演会もやる、見学会もやる、観察会もやる、なんでもやる。只見町ではブナ林や花の観察会や講演会を数多くやりますが、町民だけでなく、町外や県外からもやってきます。大々的でなくても何回も繰り返しやるのがよいと思っています。

住民に愛着と自信を持たせるには、研究者やマスコミを使うことをおすすめします。只見町には研究者がほんとうにいっぱい来ます。研究者が調査した成果を町民にフィードバックさせる。それをするとな町民はその気になります。やはりアクションをおこすこと。それとアップデートです。アップデートを常にやっておかないと、それっきりで終わってしまうのではないのでしょうか。

最後のスライドは、雪まつりの時の仕事着ファッションショーのようすです。フィナーレに、こんな感じで子供から若者、お年寄りまで、みんなが愛着と誇りをもち自分たちの文化を大切にしようと

いう気持ちでやっています。
ご清聴ありがとうございました。

【拍手】

司会：

新国様ありがとうございました。続きまして、宮川で積雪地域の民俗文化財（民具）を集めていた頃と題し、金山勝彦様、森下真次様、林直樹様、山田昌久様にお話を伺います。これから準備をしますので少々お待ちください。お話をされる方は前へお願いします。

宮川で積雪地域の民俗文化財（民具）を集めていたころ（インタビュー形式） 金山勝彦氏、森下真次氏、林直樹氏、山田昌久氏、三好清超

三好学芸員：

ここでは民具を集めていた頃、開館した頃が、どのような状況だったのか、改めて僕も知りたいな、勉強させていただきたいなと思っています。

今日は当時の村の時代から、実際民具を使っていた方ということで、金山勝彦さんに来ていただいています。まず、自己紹介と、どういう形で館に関わっていたかというのを教えていただけたらなというふうに思います。

金山氏：

恐れ入ります。金山といいます。私ははっきり言いますと文化財については、教育委員会で文化財巡視員をやってくれないかということで、40代半ば過ぎだったと思います。それから40年ほど文化財に携わっておりますが、本職は蒸気機関車の運転手でございます。ですので、学校とかいろいろなところでそういう歴史を勉強しておりません。本当に生活の中からの民具について話をできればなと思っております。

三好学芸員：

ありがとうございます。金山さんにお聞きしたいんですけども、実際民具を使われていたという中で、例えば春、田植えの時期とか、稲刈りの時期とか、あと冬とか、どのような民具を使っていたのかというようなことを教えていただいてもいいですか。

金山氏：

はい、わかりました。米づくりというのは昔から言われているんですが、米という字は八十八と書きます。それに合わせたように作業も道具も変わってきます。

最初から言いますと、昔は全部機械がないので全部手です。最初にやるのは皆さんがたもご存知でしょうが、田打ちです。この辺ではクマデと言いましたが正式には備中鍬だそうです。それで田起こしをしました。その次に、小切りというのをします。水を分けて代すきというのをします。この代すきは代すき馬と言います。細長いくわがあったんですが、それでやらないと、代かきをする牛が、牛で引いたんですけど、牛が嫌がるんです。丁寧にやらないと。だからその代すきをしました。そしてそれからようやく牛にマグワをつけて、代かきをしたと。

そこでようやく田んぼの準備ができるわけですが、一番困ったのが、稲を、苗を植える時のすじですね、すじ引き。あれはワコロガシというものが飛騨にあるんですが、これですじを合わせていけるようになれば、一人前の男と言われていたんです。なかなか私も合わせれなかったです。

そんなことをして、あとは田植えですね。これが道具等、民具等はいりませんが、腰には竹皮で苗を入れて、大体一人で一日に植える田んぼが、大体3畝目安にして人を頼みました。そんなようなことをしてようやく田植えが終わるわけですが、その後、田の草取りとか、いろいろなことをやりまして。秋になりますとようやく稲刈りがあります。稲刈り鎌というのが全国のどこでもあると思うんですが、腰の痛い仕事です。あとはそれを束ねる、藁で束ねるというのがありますが、これは私は手でしかやりませんでしたけど、これくらいの本木先が尖ったやつで、クジリと言いましたが、これを使って鮮やかに締め上げる年寄り衆がいました。私はようやりませんでした。

それからあとは脱穀等については、先ほどの写真にいろいろありましたが、足踏み脱穀機ですね。あれをやったんですが、私は6歳の時に父が戦死しまして、私が中学になると一人前に男の仕事をさせられたんです。大変でした、足踏み脱穀機は。あれはしけでしょ。稲の。うちの中からも体からもはしこてはしこて本当に稲こきが嫌でした。

あとこういったモミは、ふるいで荒ぶるいをしました。荒ぶるいをして、唐箕たてをしました。唐箕たてというのは、手で回して飛ばすようなものです。だいたいモミが揃って出てくる。本当は、それを、俵に詰めるんですが、これが今の重さで言いますと、1俵が60キロですね。私の中学の体力では、とても足で蹴っ飛ばしても動かなかったんですが、そんなことをして秋の取り入れを終わりました。

もう一つ今度は冬ですが。冬になりますと、男はね、春木山と言いまして1年間の薪作りをするんです。山へ入って。これがね、使ったのが斧ですけども、この辺ではヨキと言います。ノコを使って切り倒して、ヨキで割って春木棚というのを作りまして、これをだいたい3間から4間。6尺の高さほどの薪を積み上げたものを、たいてい3つは作らないと1年の薪が足りなかった。そういうことをしておりました。

あとは山国ですので、林業で食べている人たちの使った斧があります。マサカリがあります。ノコもあります。この辺ではガンドと言いました。大きい厚い幅広のを大ガンドと言ったのですが、これは普通の家にはありませんでした。私たちが使ったのはノコという普通のこれぐらいの幅で、これで木を切って薪を作ったと。そういうことが男の冬の仕事。

女性の方は機織りがあります。そして1年間の味噌作り。これが女性の冬の大仕事。あとは冬の子どもたちに食べさせる保存食。栗とか干し柿とかこういったものも女性の仕事でしたが、今でも覚えているのが館にもありますが、大マサカリ、あれね、刻印があるんですよ。あれは管理人じゃないと教えてくれんですよ。普通の方は見逃します。なんでああいう刻印が打ってあるのかなと思ったのですが、やはり材木を扱うということで非常に怪我が多いというようなことで、安全を祈願したり、なんかして3つ速くというようなことを習ったんですよ。

あと、今でもあります。館に一本ぞりというのが置いてあります。雪山へ入って、山で木を切ったのを引っ張り出すのに、道路も何もないので、雪を利用してそのソリに乗せて、一本ソリに大体材木を5、6本。石数にすると5石から6石を乗せて一人で山を降りていくんです。これを体験された方は、今宮川にはござらんのではないかと思います。ただ民俗館にはありますけれども。惜しいな、今あれを実現できる人があればな、とは思っております。

それからもう一つ、私は民俗館で管理当番をしていた時に、見に来られた方に教えられたことがあるんです。石臼です。豆腐、きなこ、米の粉、全部石臼を使っただけですが、石臼の裏の刻印を、どうしてああいう彫り方をしたのか知っとるかと言われたんです。知りませんよね。で、習ったんですが、6分割と8分割がありまして、するものによって刻印の刻みが薄い深いがあったそうです。そういう臼がいっぱいあったんですが、今はどこ行っても庭先に転がっております。使われなくなって。石臼の文化はちょっと調べたらすごい、ひょっとしたらいい研究材料になるんじゃないかと思うんですけども。ああいう一本ソリとか石臼とか、ああいったのが、だんだん宮川でもなくなってきております。必要なくなったんですね、機械化で。農業もそうですけれども。

だから機械によって今本当に子どもたちも、私たちもそうですが、手先が不器用になりました。昔学校でね、鉛筆、ナイフで刻むもんで器用になるっていうことを聞いたんですが、当然今もそうだと思います。機械に頼ると手先を使わんもんで。農機具の、あれがものすごい手の訓練になるんです。だからうちの子どももそうですが、学校出て就職したけど、あまりいい評判を受けておりません。不器用なんです、やっぱ。民具というものは、いろんな意味で生活もですが、人間を作っていく上にも大切なものだったんじゃないかなと思っております。そんなようなことで、またありましたら答えさせていただきますのでお願いします。

三好学芸員：

ありがとうございます。今1年間のお話をいただいたんですけども、まさに山田先生はそのあたりの道具のこと、道具をどう使ったかを記録されてこられたと思うんですけども、その目的であるとか意義というのを教えていただいてもいいでしょうか。

山田氏：

はい、これなかなか道具が並んでいても、それをどう使ったかということも今わからなくなってきつつあるし、それがどういう効果を発揮したかということも、具体的にこれで一家がどうやって過ごせたんだということも、なかなか今の人たちはわからなくなってきているんですよ。

そういうのを実際に、例えばさっきお話があった春木山で、山のコナラの木を何本くらい切ってやるかということを実際に宮川とか河合とか古川の方にもお聞きしたんですね。そしたらコナラの木

が、20センチくらいのコナラの木を20本くらい切らないと一年の薪が足りないんだというような言い方をされたんですけども、実際どのくらいの薪を切ったかというのは人によって違うのかもしれないんですけども、どのくらいお切りになられましたか。

金山氏：

薪はナラの木が一番火力が強くて、今言うは何本くらいと言われると困るんですが。先ほど言いましたように春木棚を三棚作らないと一年間なかった。だからナラの本の5本や10本じゃないと思います。

山田氏：

ちょうどこの川の反対側の森安というところでお聞きした方が家のところにまだ納屋があって、斧が15、6本くらい置いてあって、そこからちゃんと自分で選んで春木山の斧がこれだって持って行かれるんですね。

つまり斧の大きさとか重さとか、山のどういうところで作業するかということをお考えになっていて、自分の家にある斧の中で今日使うのはこれだということを選んで持って行かれた方がいらして。これはすごいなと思って10何本もある中から今日はこれがいいんだということを考えて、道具をたくさん並べておかれたんですね。

そういった方にお聞きしたら、山で切ったやつを山の途中で棚を作って置いておいて、順番に家の脇のところの棚までずらして持ち込むんだとお話しされた方が、20本のナラの木を切ったって。それでやると実際は7トンくらいの薪になるんですけども、それで1年間。まあ、まだ僕たちが調査したところでは、お風呂も各家で焚いてないというようなところもあったんですけども、宮川の暮らしは自分の家の食事やお風呂を全部その春木山で調達していたら、20本だということです。で、そんなことをやっていたら、家が20件ある集落だったら、それで400本の本を切ることになりますよね。村の里山がどのくらいないと、そういう春木山の仕事ができるのかって気になって、そういう調査をさせてもらったら、意外とそういうことを実際にやっておられる方も少なくて、最後は古川の山に近い方にもお聞きしたけれども、そこでも20本切ったってということをおっしゃっていました。だから自分の集落の周りの森っていうのが、もし10件家があったら毎年200本。今でいうと環境破壊ではなくて、里山ってやっぱり使わないといけないんですよね。その辺のことをお聞きできたのが、民具のことを調べると同時に、そういうお話を伺えた時代に僕が宮川に入れたというのは、すごくよかったなと思っています。

先ほどお米をずいぶん作られた話があったけども、宮川の集落の中でお米を作ることが普通にできる集落って、それほど大きな田んぼがあったわけではないと思うんですけども、お住まいはどちらでした？

金山氏：

私は西忍。この川向いです。

山田氏：

西忍、はい、分かりました。あそこは、ちょっと段丘の広いところもあったりして。西忍で搗屋さんの調査をしましたね。米を搗く、川の水で搗く調査をしたんですけども、そういうのもちゃんとその谷が決まっていて、という話もお聞きしたんです。あそこは確かにお米が採れる場所ですよ。なかなかお米をあまり自由に食べられたという村があまりなかった記憶があって。

金山氏：

はい、そうです。私が祖母に聞いた話ですが、西忍に学校ができたのが昭和の初めです。米2割にひえ8割、そういう弁当を持ってくる子がほとんどで、私の祖母は、私のうちは米がもうちょっと入ってあったという話は聞いております。

山田氏：

ありがとうございます。

三好芸員：

ありがとうございます。今みたいなのは、博物館で道具を見ているだけじゃなかなか聞けない話だったので、ありがとうございます。一方で、飛騨みやがわ考古民俗館には、それらを証明するような

民俗資料がたくさんあります。それらを収集して展示に至ってというようなことをされてたのが、管理されていたのが、当時の教育委員会でも実務を担われていた森下さんということで、その頃の話をお話していただけたらと思います。

森下氏：

今、紹介に預かりました森下といいます。当時宮川村の役場へ何とか入れてもらってありました。すみません、座らせていただきます。

今ほど金山さんの話を聞いておって、昔を思い出しまして、米を作った時の、私の親がおって、当然ですけど子どもの時に使われたんですけど、稲のはさってというのがこっちですと、例えば8段とか10段とかという高いはさを作るんですね。そこに稲を掛けるんですけども、子どもは身軽なもので、お前が行って上で取れということで、下から稲を放りあげて、上で捕まえて掛けていくという作業をやったなということを今思い出しました。懐かしいやら、昔に戻りたくないやら、そんなような気持ちであります。

民具の関係なんですけども、私も直接関わっておらんのですが、聞いた話ですと、昭和56年から民具を集めだしたというふう聞いておりました。その後、昭和58年に宮川村には敬老会というのがあったんですけども、高齢者の勉強する場ということで、高齢者学級というものを作っておりました。昭和58年に高齢者学級で、岐阜の方の歴史資料館ですかね、民具の活用みたいな話を聞きに行かれたら、そこで皆さんがすごい感銘というか感動を受けまして。帰ってきてから、民具同好会というのを作ろうとか、自分史を綴るかという、自分たちが歩んできた道の歴史を残しておこうとか、古文書を解く会というような、そういうものはそこから発生したようです。民具同好会はそこから昭和58年にできまして、いろんな研究をされたというようなふうにお聞きをいたしました。民具なんですけれども、その後昭和62年に、国指定の重要有形民俗文化財を受けるんですけども、収集にあたっては職員の方が、民家の方を訪れて分けてもらってきたというふう聞いております。

で、何で民具を集めるに至ったのかなというふうにと考えると、昭和29年、30年頃にこちらの方で関西電力の関係でダムができて、民家が消滅していくとか。また、その作業員を泊めるために農家を改築して、家を貸し出すというようなことをするために、いらんものは捨てるというようなことがあって、その対象が民具だったというようなこともありまして、これはなくなっていくぞというようなこともあって、その民具を集めたというふうにお聞きをしております。ある意味ではお金がかからんのかなということも、行政側から考えるとあったのかなというふうに思っています。

ある時にはやっぱり「天井裏にあるで持ってけよ」とか、「そこにあるで持ってけ」って言われると、懐中電球を持って暗いところを手探りできながら、民具を分けてもらってきたというふうにお聞きしております。先ほどの只見町の方が言っていましたけれども、やっぱり洗って、綺麗にしないと、スズで汚れたりしているものですから、この公民館の裏に側溝があったんですけども、冬にそこで、私たちが部署でしたので、ブラシでこすっているのが大変だろうなというようなことを思っていましたら、やはりその人は手記にちょっと残っていて、冬はほんと身にしみる寒さで体に応えましたというふうに書いてみえたので、やっぱりそうやったのかなというふうに思います。

この収集に当たっては、当時の文化庁の天野という先生がみえまして、その方にいろいろ指導を受けながら、収集されていきました。あと宮川出身で、隣の古川町へ出られた田畑かずえさんという方が結構そっちの方に詳しくて、その天野先生を紹介してくれて、民具の収集に当たっているというような流れでした。なんでそれが国指定になったんでしょうねと不思議に思ったものですから、当時の方が高齢であったり、体調崩されて、なかなかパッパッと聞きするわけにはいかなかったのですが、なんとかかんとかお聞きをしておりましたら、天野先生の方から国指定にも向けていくような、そういう指導も受けながら一緒に集めていったというふうにとっております。

流れとしてはそんなふうで、昭和56年から収集を始めまして、昭和60年の3月に国指定の文化財になったというふうな流れできております。

三好学芸員：

詳しくありがとうございます。そうして収集された民俗資料と、先ほどの林直樹先生のお話でもあったんですけど、横に考古の部屋も併設してという形になったと。林先生のお話の中では、どちらの研究もできる施設というようなポイントがあったのかなと思ったんですけど。林先生は実際7年間宮川におられて、どういう部分で、民俗と考古と同じところがあるのか、民俗と考古が違うところもあるのかといったことを、これは展示室の写真を持ってきたんですけど、それで教えていただけることがあったらありがたいなと思います。

林氏：

どちらも生活道具と言えば生活道具で、モノなんですね。ただ決定的な違いは、民具の方は使い方がわかる。中には使った人の話がしっかり聞けるものがあるということですね。

考古の場合は基本的にはそれができない。過去のもので考古学者が形式分類したり、用途を推定したり、あるいはそれを実験して検証したりということをするんですが、それが果たして本当かどうか。山田先生と話をする中で、山田先生のご専門は先史時代に遡る木製品から近現代まで通してやっていらっしゃる。例えば学生さんに、雪かき用のバンバ板、これなんかは、用途別にちょっと形が違うんですね。ちょっと意地悪なんですけど、それを教えずに、考古の方法で分類をしてみろ、幅とか長さとか重さとか。それを答え合わせをやる実験を我々は観察すると。学生さんは目隠し状態でそれをやるということをやったんですよね。それがきっかけで山田さんの調査になったんですけども、その辺を私から、山田さんに質問していいですか。その答え合わせの状況どうでしたっけ。

山田氏：

バンバってヘラの部分がすごく幅が大きいものから、柄の長さが3mになるようなものから、いろんなものがあるんですね。旧宮川村って、宮川の川の脇にある村と、谷を登っていく村があって、谷を登っていく村というのは、逆に降りていく道を全部雪かきしないと移動ができなくなっちゃう。それから長いやつを見たら、宮川ではない資料がいくつかあって、合掌造りが潰されない用だった。白川のやつが一点あった。そうすると、長いバンバは道の雪をどけるんじゃなくて、高いところや遠いところの雪をどけなければならないような作業に使うようなところで、長いものがあったりしました。バンバの中には実用で雪をどける以外にも、信仰として鬼が書いてあって、棒が何本か置いてあって、うるう年は何本でだとか書いてあって、鬼が村に入ってくるのをバンバのそこの筋を見て、あ、今年は違うと思って帰っちゃうんだって。そのようにもバンバが利用されているということもあって、バンバの形やそこについている模様とか、そういったもので宮川村の山のほうの村と、川のところの村では、バンバの使う種類が違うとか、そういったことを学生さんが見つけてくれましたね。

だから思ったよりも考古学だったら、Aという形とBという形とCという形があるよ、ということしか言えなかったんだけど、採集地、使用地を見ることによって、その村がどこにあるかで、バンバの形の違いの意味が判断できたというのが、本当に入って最初の頃の調査ですね。

そういったところも分かったので、そういうようなことを考古学では全くできないのに、民俗資料だと議論をする情報まで伸ばすことができる。僕が宮川に入ったときは、考古学のモノ研究というのが、時間の整理とか、場所の、もっと広い空間の整理ができるんだけど、それ以上に遺物研究はできなかったんですね。そのため民俗史を見たり、実験をするということが必要だなと思って、僕の大学生活は、実験考古学と民俗史考古学にずっと使った。これが僕の宮川に入ったときに一番大きな、宮川に来たいというインパクトでしたね。

三好学芸員：

ありがとうございます。最後、大きな意味まで教えていただいたのかなと思いました。最後になってしまうんですけれども、金山さんと森下さんから、みやがわ考古民俗館に対して、守っている僕たちでもいいんですけれども、一言ずつ、どうしてほしいとか、どうなればいいなというような、夢を教えていただけたらありがたいなと思うんですけれども。

金山氏：

あそこに行ったときは、本当に宝物だと思いました。だけど、今の生活には実用性がない。その辺をどうすればいいのか。それにより、あそこで案内してくれるガイドさんが、やはり民具について、何も知らない見学者に教えてくれれば、また来館者が増えるんじゃないか。そんなことは思っております。

森下氏：

すみません、これは私の言葉でないんですけれども、国指定の文化財になったときに、天野先生が書かれた文章がありまして、その中に書いてあるんですけれども、過去の歴史や民俗を知らずして、将来の生活設計は十分とは言い難い、というふうに書いてあるので、私は収蔵庫の民具がそのような使われ方をしてくれるといいな、と思っていることが1点。

もう1点、この宮川というのは、町と言っておりますけれども、人口がどんどん流出していくところでありまして、外へ行かれても、また戻ってこれるような、戻ってきたときに、「ああ、そりゃこ

ういうのがあったな」とか、「私は使ったよ」とか、「そりゃじいちゃん、ばあちゃんに話、聞いたことあるわ」というような、そんな役目を果たしてくれると嬉しいなというのが私の思いです。

三好学芸員：

ありがとうございます。引き継いでいく僕たちも、今のお話はちゃんと心に置いておきたいなというふうに思います。すみません、時間がオーバーしてしまったんですけれども、これでインタビュー形式での対談を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

司会：

皆さま、ありがとうございました。これより休憩時間に移ります。午後の部の開始は13時です。昼食を持参されている方は、こちらの会場でお召し上がりいただけます。開始時刻までに各自昼食をお取りいただき、お席にお戻りください。また、いくつかお知らせがあります。まず1点目が、本日多くのお祝いメッセージをいただいております、そちらが入口横の掲示板に掲示しておりますので、ぜひ皆さまご覧ください。昼休みの時間に後ろの、謎のコーナーがあると思うんですけど、そちらのコーナーで石棒神経衰弱というゲームを開催します。何やこれと思った人はぜひ挑戦してみてください。

以上、これから休憩の時間です。

【昼休憩】

=====

司会：

お時間になりましたので、午後の部を開始いたします。

はじめに、宮川小による飛騨みやがわ考古民俗館のガイド活動の意義です。昨年度、宮川小学校の全校生徒児童8名は、当館でガイド活動をしてくださいました。自ら学び、伝えることの意義について、実際にガイドをした宮川小学校の皆様からお話をさせていただきます。それでは、よろしくお願いします。

宮川小による飛騨みやがわ考古民俗館のガイド活動の意義

宮川小学校一同

これから、宮川小学校の探究学習の発表を始めます。

私たちは、令和5年度、池ヶ原湿原の探究をしました。そこで、池ヶ原湿原を守る人の思いに触れ、自分たちにできることはないかを考えました。そして、湿原にとって邪魔な存在のヨシを活用して、湿原をPRすることを目指しました。しかし、探究を進めていくと、ヨシの繁殖を弱らせるために、夏に刈る池ヶ原湿原のヨシでは、強度が弱く、自分たちで作ることができるヨシストローや、ヒンメリといった製品に向いていないことが分かりました。これは、現在、池ヶ原湿原のヨシの活用については、保護センター長の岩佐さんを窓口として企業との連携を探っている状況です。

5年度の探究では、ふるさとに対して自分たちでできることと、できないことがあることを学ぶことができました。これは大きな成果になりました。そのため、昨年度の探究学習では、5年度の成果から、実現可能性や持続可能性の視点からふるさとに関わっていくことを大切に学びを深めました。

昨年度は、宮川再発見プロジェクト、宮川キッズアンバサダーとして、宮川の素敵を伝えようというふるさと学習の中で、飛騨みやがわ考古民俗館をテーマに探究学習をしました。この探究学習を行うことになったきっかけは2つあります。1つ目は、宮川振興事務所の清水さんに宮川のことを教えてもらったことです。日本全体と同じように、宮川町にも人口減少と高齢化率上昇という現状があります。これらは、宮川町の良さを知る人や、その良さを伝える人が少なくなっていることにつながります。私はこれはまずいと思いました。だから私たちも宮川に住む一人として、自然・文化・優しさいっぱい宮川のいいところを大切にし、伝える人になりたいと思いました。2つ目は、この記事です。文化振興課の三好さんたちは、飛騨みやがわ考古民俗館を残していくために無人開館に踏み切りました。この記事には、博物館協会の方の言葉でこのように書かれています。『廃館したら地域の文化を未来に伝えることが難しくなる。資料が域外流出する可能性がある。』私は近くに住んでいて、何度も考古民俗館に行ったことがあります。宮川の人の思いが詰まったものが、宮川からなくなってしまうのは嫌です。三好さんたちは、このグラフのように、来館者を少しでも多く増やそうと努力し

ています。私は必死で守ろうとしている三好さんたちが素敵だと思いました。だから私たちも少しでも多くの人が考古民俗館に来てくれるように、自分たちでできることをやっていきたいと思いました。

はじめに思いついたのが、良さを伝えるガイドです。私たちは7月に実際に考古民俗館に行き、自分がいいなと思うものを伝えることに決めました。そして学芸員の保谷さんや地域の立田さん、桑田さん、岩佐さんに教えてもらいながらプレゼンを作りました。

9月、プレゼンを地域学校共同本部の方や、桑田さん、ガイド活動をしている岩佐さんに聞いてもらいました。そこで「聞く人が楽しくなるように効果音をつけたり、もっと詳しく説明したりするといいんじゃないかな。」「実際に使ってみた感想を言うと、生きたガイドになると思うよ。」「子どもガイドの日を作って、たくさんの人を呼ぶといいんじゃないかな。」「名前が飛騨弁のものががあるので、飛騨だから、宮川に住んでいるからこそ分かることを伝えるといいと思うよ。」と、たくさん教えていただきました。また、市長の都竹様や教育長の下出様に実際にガイドをして、たくさんアドバイスをいただきました。緊張したけど楽しそうに話を聞いてくださったり、良いところを褒めていただけたので、8人とも嬉しくなりました。

9月の地域の皆さんとの学びを通して、私たちは、来館した人が楽しめる考古民俗館にしたいという思いを持ちました。そして、来館した人が楽しめる考古民俗館にするために、どんなことができるかについて、全校8人で考えました。持続可能性と実現可能性から考えると、私たちのガイドを二次元コード化し、展示物の横に掲示する。子供ガイドの日で小さな子でも楽しめるように、クイズラリーを作って、完走者にオリジナルキャラのマグネットを渡すことができると考えました。

9月にいただいたアドバイスから再調査し、作成したプレゼンを使って、11月2日に半日館長となり、ガイド活動をしました。子供ガイドの日の様子を少し動画で流しますのでご覧ください。来館したみなさんからは、「私が住んでいる富山市には神津川が流れているので、縄文時代から交流があると知って面白かったです。」「宮川を大切に作る気持ちが伝わりました。」「石棒だけでなく、民具についても多く説明があつて良かったです。」「オリジナルキャラクターが全部かわいかったよ。」「クイズ楽しかったよ。」「大人になるにつれて昔のことを学ぶ機会が減っているので、このようなイベントは嬉しかったです。」「宮川の文化がどんどん薄れていく今、子どもたちが探求して文化を受け継いでいってくれと思うと、こういうことが大事なんだと感じさせられました。」「宮川小の子たちがふるさとを盛り上げてくれて嬉しいです。」「これからも続けてほしいです。」などたくさん感想をいただきました。

私たちが探求してきたことが、大感謝の笑顔になって嬉しかったです。

探求学習を通してもう一つ嬉しかったことは、地域の皆さんが私たちの探求に積極的に関わってくださったことです。考古民俗館で再調査をしているときに、スクールバスが止まっているのを見て、通りがかった岩佐さんが来てくださったり、子どもガイドの日のリハーサルに地域の沖畑さん、岡本さん、水上さんが駆けつけてくださったりしました。地域の皆さんと近くなったと感じたし、ふるさとの宝物をみんなで大切にすることなんでしょうと思いました。

これから日本全体でふるさとの良さを知る人や、その良さを伝える人が少なくなっていくと思います。探求学習を通して、私たちは考古民俗館に大切なものがいっぱいあることを知りました。そして、考古民俗館を好きになりました。考古民俗館の良さを伝えることが自分たちの嬉しさになることも学びました。そんな私たちのガイドをこれからも見てもらうために、二次元コード化しました。一人一人がどんなガイドをしたのか紹介します。

僕は土器のガイドをしました。これが二次元コードです。

僕は輪かんじきのことについてガイドしました。きっかけは、僕のおじいちゃんが輪かんじきを持っていたことです。僕がガイドをして楽しむだけではなく、見てくれた人も楽しめるようなガイドになっているので、ぜひ見てください。僕はズンベのガイドをしました。伝えたいことは、他にも藁打ち石や藁打ち機というものがあるので、ぜひ考古民俗館に行ってみてください。私はバンバのガイドをしました。多分バンバのことを知っている人は少ないと思うので、私の二次元コードを読んでバンバのことに詳しくなってくれたら嬉しいです。私は土器のガイドをしました。昔にはこんなものがあったんだ、こんなことに使っていたんだ、などと、このガイドを見て学んでくれたら嬉しいです。

僕はみやがわ考古民俗館で魚を採るコーナーのガイドをしました。昔にはこんな大きな鮎がいるんだな、と知ってもらって嬉しかったです。

僕は石棒についてガイドをしました。石棒は考古民俗館に 1074 本あるなど、考古民俗館の石棒についてガイドをしています。ぜひ見てください。

そしてこの二次元コードは去年卒業した日向さんのガイドです。日向さんはシュータンについてガイドをしていてどのように使うかなどを詳しく説明しています。

ぜひ見てください。

今後、池ヶ原湿原や種蔵など探求のフィールドを広げながら、ふるさと宮川を再発見し、宮川の良さをガイドなどを通して伝えていけるようになりたいと思います。これで宮川小学校の発表を終わります。ありがとうございました。

ありがとうございました。気をつけ、礼。

【大拍手】

司会：

宮川小学校の皆様、大変素晴らしい発表ありがとうございました。可愛い皆さんの発表で、私もすごく温かい気持ちになって、皆さんも温かい気持ちになったと思います。

続きまして、民俗誌研究の前線-岩手県遠野市・宮崎県椎葉村での研究/生活-と題しまして、宮崎県椎葉村の森内こゆき様にご講演いただきます。

森内様は現在、宮崎県の椎葉村の博物館でご勤務をされており、ご自身の強い問題意識のもと、研究のフィールドを選択されてきました。それではよろしくお願いいたします。

民俗誌研究の前線-岩手県遠野市・宮崎県椎葉村での研究/生活- 森内こゆき氏（宮崎県椎葉村）

ご紹介ありがとうございます。飛騨の皆さん、初めまして。改めまして森内こゆきと申します。宮崎県椎葉村といいまして、日本三大秘境の一つに、お隣の白川村とともに数えられている、本当に山奥からやってまいりました。小学生の皆さんの素晴らしい発表の後で恐縮なんですけど、今回はざっくりばらんに、私の興味関心、特に研究分野の関心と、私が続けてきたフィールドワークと、その地域で、どういう民俗学とか考古学の成果を生かした取り組みがされているかということを皆さんにご紹介できたらなと思います。本当に取り留めもない発表になってしまうんですけども、よろしくお願いいたします。

私自身のことなんですけど、生まれは兵庫で、育ちは滋賀県です。もうずっと滋賀県にいました。大学は同志社大学というところの哲学科を出てまして、ずっと思想を研究していました。今、京都大学の大学院のアジア・アフリカ地域研究研究科というところに所属してまして、博士課程の学生です。学生をやりながら、今、その椎葉村の、椎葉民俗芸能博物館というところの学芸員を務めております。

椎葉に移住する前はですね、2年間岩手県の遠野市で河童の研究をしていました。遠野という名前でピンと来られる方も多いと思うんですけど、柳田国男が書いた『遠野物語』の舞台です。その後、その椎葉の仕事をしてながら、兵庫県の福崎町という、これまた柳田の出身地にある大学で、半期だけ妖怪学という授業があって、その講師もしていました。そんな感じで紆余曲折あって、今椎葉村に暮らしております。もうすぐ2年が経ちます。

私の研究の出発点というところで、本当に個人的なお話で恐縮なんですけど、私、実は幼稚園の頃から高校生までずっとパティシエを目指しておりました。高校生のみんなが受験勉強をしているときに、私はケーキ屋さんでバイトをしていまして、そのアルバイトをしていた期間が、夏休みから卒業まで8ヶ月間だったんですけど、その間に先輩が2人、救急車で運ばれる事件がありました。もう過労で倒れてしまったんですね。そういう事件があって、何なんだこれは、ケーキって私はすごく幸せな食べ物と思っていたのに、その幸せな食べ物を作っている人がこんなに苦労しているのかと思って、社会に怒りを覚えまして、その原因は何なのだとということから哲学科に入って、いろいろ社会の仕組みとか政治とか経済のことを勉強しています。

一番私は今の社会の仕組み、特に資本主義の仕組みで不思議だなと思っているところは、すごく簡単に言うと、働く人が8時間の間に、例えばパティシエが8時間のうちにケーキを50個作ったとするじゃないですか。そのケーキを1個500円で売っているとしたら、50個だったらだいたい2万5千円になると思うんですけど、その労働者の給料が例えば8時間働いて、時給が1000円だったら8000円しか稼げないんですよ。そうしたらその労働者が8時間でケーキを作ったのに、その人はその8000円で自分の作ったケーキを全部買えないんですよ。この価値の差はどこに行ったんだということを、ずっと興味を持って調べております。これも経済の理論でいうと、カール・マルクスと

いう人が資本論に書いている疎外という概念がこれにあたるんですけど、これはどこから来ているんだというのに、ずっと興味を持っていろいろ調べています。で、今、紆余曲折あり、椎葉に行くんですけど、ちょっと飛ばしますね。

研究の今のテーマとしては、現実と幻想の関係というのをずっと追っています。それは、価値がどこで急に増えたり減ったりするんだというところに関心を持っているうちに、そういうところに行きまして。ものから急に価値が増えたり減ったりするこの仕組みの全体に興味を持って研究しています。

今、私は専門は文化人類学と人偏の民俗学を専攻しています。文化人類学の手法で、他者の声に耳を傾け、真剣に受け止めるというのが調査の方針です。後は野家啓一という歴史哲学をずっと専門にされている方が、自分は科学者としてありながら、その科学というのは、科学者が作った物語の一つにすぎないというふうに言っていて。だから、私は研究者の立場なんですけど、研究者として私が言っていることは一つのお話にすぎなくて、そこに過剰な価値はなく、普通の人が話すことも私が話すことも同じなんだ、みたいなことを言っています。

後は保苅実という歴史学の方を、私、本当に尊敬しているんですけど、この方も同じようなことを言っていて、歴史というのは日本史の教科書とか世界史の教科書みたいに、何か決まったような出来事の羅列なんではなくて、一つの出来事についてたくさんの人が、それぞれの立場からそれぞれ異なる説明をしていて、それも状況によって表現が変わったり内容が変わったり、嘘か本当かの区別ってどこで判断できるの、みたいなことを丹念に記述することが歴史なんだと言っていて、こういったような方針で、私は今地域の皆さんの声を拾い集める民俗学という学問をしています。

こういったところが私の研究の前提としてあるんですけど、一体私がどういったことをフィールドで拾っているのかということを見たいと思います。

私のフィールドは2つあります。自己紹介でも挙げたんですけど、一つ目が岩手県の遠野市です。遠野は日本の民俗学を創始した柳田国男が3番目に書いたとされる民俗学的著作の舞台です。『遠野物語』読んだことがある方も多いと思うんですけど、119の遠野のお話が入っている本で、河童とか座敷童子とか、そういう神様とか妖怪と呼ばれるものの不思議なお話が記録されている本です。

もう一つのフィールド、今も住んでいる宮崎県の椎葉村は、これまた柳田の著作の舞台となっていて、これが柳田が書いた民俗学的著作の一冊目と言われている、この四字熟語で『後狩詞記(のちのかりことばのき)』と読みます。これは椎葉村の狩りの故実について記録した本です。こういう地域の背景があるもので、それぞれの地域でどちらでも民俗学の記録が膨大にあります。先行研究者もたくさん入っていますし、地元の方たちも、たくさんそういう民話、昔話ですとか、狩りの習慣、民俗、習俗を記録することの価値を分かって記録しているという方がたくさんいらっしゃる地域です。

そういう記録、民俗学の実践自体を、私は地域の人たちが歴史をやっているというふうに解釈して、その歴史の蓄積がどういうふうに展開しているのかということ、今、地域で見えています。民俗学ってそもそも何か、分かるようで分からないと、私は博物館に勤めていてよく来館者の方に言われることがあるので、ちょっとだけ書いてみたんですけど。私はそうやって来られた方に、民俗学って何ですかって言われたら、こういうふうに説明するようにしています。文字の読み書きができなかった普通の人たち、私みたいな普通の人間の普通の生活について記録する学問です。というふうに説明しています。というのが、文字の読み書きができない人が大半だった時代がたくさんあって、でも日本史とか世界史の教科書に出てくるのは、織田信長とか徳川家康とか、時の為政者の生活しか分からないということが多いと思うんですけど、歴史って、私の研究の前提のところでも述べたように、普通の人たちの普通の暮らしによって構成されているものなので、そういうものを拾い上げていく、というのが民俗学者の仕事です、というふうに言っています。

早速、私の今住んでいる椎葉村について少しご紹介したいと思うんですけど、この写真のような風景で、私ここに来る道中、あ、椎葉にすごく似ていると思いながら、それこそ只見の新国さんと同じような気持ちでここまで来たんですけど、本当に急峻な山々に囲まれている地域で、県としては宮崎県になるんですけど、熊本空港が最寄り、熊本空港から2時間ドライブすると、椎葉村に着きます。九州の真ん中にある九州山地のさらに真ん中にあたるんですけど、この山々に囲まれた地形が特徴で、三大秘境に数えられています。人口は今2,200人ぐらいで、人口密度に数えると4人ぐらい、東京23区、少し小さいぐらいの面積に2,200人しか住んでいないというような村です。結構状況は宮川と近いのかなと思って聞いていました。椎葉も小学生が一番少ない小学校が全校生徒5名です。

ご覧の通りの人口ピラミッドで、超高齢化地域で、小学校が5校あるんですけど、1校につき8名というようなところもあったり、中学校は1校しかありません。高校が村内にはなくて、高校生になると村外に流出してしまうというような、人口の構造になっています。

自治体の現状として課題がたくさんあり、超高齢化社会であって、もちろん文化の担い手も少ないですし、働き手も少ないんですけど、その一方で地域ぐるみで子育てができたりとか、都会に比べて学校現場で生徒の数に対して先生が充実しているので、ケアはされていたりします。

あとは立地の悪さも課題ではあり、毎年台風とか集中豪雨で道路が決壊したりとか、建物が1階だけ流されたりとか、そういうようなことがたくさんあるんですけど、一方でそうやって壊れた道を村民の方が自分の手で直したりとか、あとは水が断水したら自分たちで山水をひいてきたりとか、そういった技術を今も村民の方が手放していなくて、そのおかげで固有の民俗文化みたいなものも残りやすかったというような特徴もあります。

あとは昔から続く労働形態の非職が多くて、若者にとって魅力的に見えるような仕事が少なかったりはするのかなと。あと私が自分で働いていて思うのは女性が働きやすい環境かどうかというようなところがなかなか保証されにくかったりとか。でも一方で、生活の根幹を担っている、食とか農業に関わるような働き口はたくさんあるというような現状があります。

これって宮川もきっと同じなのかなというふうに思っています。今回元々の打ち合わせで、今回どういう話をするといいのかなと考えていたときに、やっぱりその今の現状と、この考古民俗館の現状ってやっぱり切り離せないのかなと思っていまして。やっぱり高齢化が原因で民具のそもそもの使い方が分からなくなってきたりとか、あとは立地が悪いので地域の今の人口で地域の文化を継承していけるのかとか、あとは地域外にどうやって発信していくのかとか、あとはお金にならない文化教育職、私みたいな職に就いている人の雇用をどうやって維持していくのかとか、そういう同じような課題を持って椎葉もやっております。

椎葉の場合は一体どういう文化継承がされているかということを実際にご紹介したいと思います。椎葉の一番よく知られていると言っても過言ではないのが、焼き畑農業です。焼き畑って皆さん、されてた方もいらっしゃるでしょうか、もしかして。飛騨にもいらっしゃる？

（客席）「昔はあったけど、今は。」

そうですね。

椎葉は今も焼き畑農業現役でされている方がいらっちゃって、去年は5軒で火入れが行われました。焼き畑農業って簡単に言うと山の森であったところの木を下ろして、その下ろした木の枝を燃え材にして山に並べて置いておいて、そこに夏場に火を入れまして、山を燃やすんですけど、何を燃やしているかという、土の腐葉土の層を焼いていて。腐葉土を灰にすることで灰がアルカリ性なのでそのまま栄養分になるというような、今は有機農法として再注目されていて、全国で絶滅してしまったところでも復活しようというような動きも出てきているんですけど、椎葉ではこの焼き畑農業を日本で唯一途切れることなく継承してきているということで知られています。この焼き畑農業で2015年に世界農業遺産にも登録されています。

あとは狩猟の文化ですね。この写真はうちの博物館に展示されているもので、山の神に正月とか冬のお祭りのときに捧げたりもするんですけど。基本的に椎葉はイノシシ狩りです。最近シカも増えてきていて半々ぐらいになっているんですけど、猟はチームでやることが多いです。チームには人だけじゃなくて猟犬も加わってまして、犬と一緒に人がイノシシを狩って、イノシシが獲れたらその内臓とかを猟犬にも分け与えて、みんなで獲物を獲って、みんなで獲物を食べる仕組みを持っています。これ狩猟の映像です。ちょっと音が分かりにくいんですけど、今猟犬が吠えています。こういうような感じで猟犬が山から追い立ててきた獲物を、人が待ち構えていて、鉄砲で撃つというやり方をしています。

こういう狩猟のやり方とか、あとは山の神に対して獲物を捧げるような儀礼を記録したのが柳田の『後狩記』です。椎葉は神楽という芸能がありまして、今2200人の村なんですけど、椎葉村26の地区にそれぞれの神楽保存会があります。今も15件ほどは土曜の夜から日曜の昼まで夜通しの神楽祭りをしています。

これは、先ほど出てきたイノシシの肉なんですけど、公民館の中でイノシシを丸々一頭さばいて、それを串刺しにして、松明で炙って、神様に捧げて、その後参加者全員にも振舞われて、全員が、神様と人が同じものを食べて、ここから神楽のお祭りが始まるというものです。神楽というと舞ってい

るところが印象あるかなと思うんですけど、椎葉神楽では半分ぐらいがこういう神事ごとと唱え事が続きます。

こういう焼き畑とか狩猟とか神楽の文化を維持している理由が、やっぱり地区のコミュニティーが強いことかなというふうに考えていまして、私は日々の椎葉の皆さんの暮らしぶりに毎日一番感動しています。左は神楽のお祭りのときに婦人会の皆さんが参加者全員にお振舞いをこうやって集まって調理して、おやつを食べたりしながらされている様子です。

右は焼き畑農家さんで、焼き畑まで家から10分ぐらい山を上がっていくんですけど、その道中に橋がかかってまして、その橋がちょっと台風で壊れたので、直されている様子です。その橋のところにこの左側に見える杉の木を今から入れて、ここに土をかぶせていって、道を修復しようという作業の途中です。

こういう作業を、地区の皆さんで協力してされたり、あとは草刈りを、いつ誰がどこまでやるんだとか、去年はいついつにやったけど暑かったじゃないか、もっと早くしようぜとか、そういう話を2時間くらいされた後に、よし、焼酎を飲むぞと言って、皆さん酒を飲まれて、ベロベロになって解散するというようなことを、毎月顔を合わせてされています。今もそういう集まりがあるのがすごいなと思って見えています。

私が椎葉でそういうことを見ながら考えているのが、地域の人たちの共同体のつながり、こちらで言う結ですね。椎葉の言葉でかてえりと言っているんですけど、そういうコミュニティーが今も強く残っていることと、あとは道を作ったり、山水を引いてきたりするインフラ技術が、今も皆さん一人一人の手に職をつけてされているというのが、椎葉の特徴かなというふうに思っています。これがこの後どうなっていくかというのは、私も気になって考えているところなんですけど、現在の椎葉、これから椎葉がどうしていきたいのかなということも、少しご紹介したいと思います。

私、実はですね、京大大学院生と椎葉村学芸員という立場と、もう一つ立場があります。実は地域おこし協力隊として椎葉村に移住しています。椎葉の場合は、長期総合計画に、地域おこし協力隊を5年間で40人採用しますという目標を掲げてます。協力隊の制度自体は村役場の地域振興課が主導しています。椎葉は今、協力隊現役で22名いまして、人口が2200人ですので、人口の1%が協力隊となっております。協力隊ではない移住者の方もいく人かいらっしゃいます。

椎葉は協力隊の募集の仕方がユニークでして、いろんなタイトルを付けています。秘境100年の森づくりの先駆者というタイトルで、ただ自発型林業をしてほしい方を募集しています。そのネーミング一つで、ここでもらしたいなと思ってきてくださる方がいらっしゃったり、人を育てるeスポーツプレイヤーというのがいたり、私たちは山奥学芸員という名前でも募集していただいているんですけど、あとは図書館の司書さんでも新クリエイティブ司書とか、エディトリアル司書、エディトリアル、編集する人ですね、編集する司書というようなタイトルで来ていたりとか、こういうさまざまな募集の工夫をしています。協力隊が今こういうような人数構成になっています。

民俗学のこれまでの記録を利用した地域づくりも、さまざまやっております。例えば、左が村の図書館で、さっき地域おこし協力隊の募集であった司書さんが建てたものなんですけど、ここに椎葉の場合は、図書館の入り口の一番目立つところに、椎葉の民俗文化についての過去の研究書ですとか、柳田国男や宮本常一の民俗史に関わる書籍がたくさん、ずらっと並んでいます。

右が私の勤めている民俗芸能博物館なんですけれど、これは椎葉の神楽のお祭り道具の御幣をみんなで作ろうというワークショップをしている様子です。

あと私は柳田国男が椎葉村を訪れたときに、最初に越えてきた峠を歩いてみようという民俗学のツアーを作ったりもしています。でも私は山登りは素人なので、自然ガイド、ネイチャーガイドを専門にされている方に指導していただいて、一緒に作ったりしています。

これは博物館の企画で、一汁一菜で有名な土井善晴さんが椎葉の文化にむちゃくちゃ興味を持ってくださっていて、こちらの椎葉のミチヨさんとチカエさんのお二人が、土井先生に椎葉の食文化を教えるという形式のワークショップを開催しました。

見ていただいた椎葉の皆さんの歴史実践は、本当に私は一周回って最先端じゃないかなというふうに毎日考えております。SDGsとかもわざわざ言わなくても椎葉に残っているじゃんという気持ちで毎日過ごしております。すいません、こういう感じです。

ちょっと時間が押してきたので駆け足になりそうなんですけど、私のもう一つのフィールドの岩手県遠野市についても少し紹介させてください。

遠野はご覧のとおり東北地方にありまして、地形的な特徴で言いますと盆地です。ちょっとこの写真だと分かりにくいんですけど、雲海が広がると、すり鉢状に山があって、真ん中に雲海が広がっているような。湖の底に沈んでいたという伝説もある地形です。

この盆地地形が遠野に妖怪や神様にまつわる不思議な伝承がたくさん残った理由の一つと言われています。というのが、山を越えて盆地の底の城下町に交易でやってくる人たちがたくさんいたという話になっていて。このあたりだと中馬って言うんですかね。駄賃付けの仕事。馬を引いて荷物を運ぶ仕事をされていた人たちが近くの地域から山を越えて、遠野の町中で色んな山中での不思議な話をし、また帰っていくというので、町の中、盆地の底に不思議な話がたまっていたというふうに考えられています。

『遠野物語』は不思議な話がたくさんあるんですけど、カッパの子供が生まれたのはあそこの家だとか、そういうふうに全部の不思議な話はどこの家の話かとか、どこの地区の話でいつの時代でというのがすべて特定されているのが民俗学的な特徴です。そういう民話の文化を利用してこれまでまちづくりをされてきたので、遠野の皆さんは、結構柳田国男の『遠野物語』に描かれた民話を暮らしの中でもたくさん利用されてきました。

例えばこれが市民劇といって、脚本、監督、音響や照明や演者がすべて市民でされている遠野物語ファンタジーという市民劇なんですけど。これも毎年新しく遠野物語を題材にして脚本を書いて、皆さんが演じてというのを繰り返して、もう 50 年が経つ文化です。

これが私がメインで調査していたものなんですけれど、芸術展の Iwate, the Last Frontier というタイトルで、若い移住者と地元出身の、遠野出身の方が企画されていたものです。この企画ですね、『遠野物語』の 32 話に猟師の話が出てくるんですけど、その猟師にまつわる伝説がかなりの数残ってます。その伝説をリサーチしつつ、芸術家たちと一緒にその作品を新たに再解釈して新しい物語を作るといような企画でした。

真ん中の白髪の方がアメリカ人のエバレット・ケネディ・ブラウンさんという方なんですけど。こういうエバレットさんの右手に揺れている昔の写真機で、今の岩手で暮らす若者を撮影するフィールドワークをしました。この過程で芸能を今もされている方とか、食文化を継承しているような若者を記録していきました。

もう一つがこれ、漫画家の五十嵐大介さんという方で、この方ともその猟師にまつわる伝説の残っている土地をめぐるフィールドワークや、歴史調査をしまして、そういった物語の残る土地を作品にしていって作業をしました。

作品作りの過程では、今までに見つかっていなかった史料もありまして、その猟師にかかわる新しい歴史も分かっていったんですけど、地域の秘密のような歴史だったので、そのまま表には出せないということで、芸術作品として昇華されました。

この企画をされていた方たちが一番不思議がっていたのが、その遠野の土地の歴史や民俗を深掘りすれば深掘りするほど、なぜかそれがグローバルに注目されて。外国人の方をたくさん集めたりですとか、芸術家を新たに呼んだりですとか、そうやって次の活動にもつながっていったのが不思議だったとおっしゃっていました。

私の発表は以上になります。

とりとめのない話だったんですけど、私の発表のまとめとして、まず、科学とか歴史って私たち研究者のものじゃなくて、その地域の人たちのものであってほしいなという前提で研究をしております。私もそのフィールドで生活させていただいている立場なので、私も一住民として、椎葉で何を感じているとか、遠野で何を感じたとか、そういうことを大切に記録して、そういう民俗史（誌）を書きたいなというふうに思っています。あと、そうやって歴史とか科学に関する営みは、普通に調査研究して、論文を書くとか、本を書くとか、そういうことに限らなくてもいいのかなということを常々思ってます。今日ご紹介したような生活に根差したものであってもいいし、芸術とか観光コンテツとか、自分の仕事にしちゃった方が興味を持って続けられたりすることもあるのかなというふうに、遠野と椎葉で学んできました。ご清聴ありがとうございました。

【拍手】

司会：

森内さま、ありがとうございました。

続きまして、1995 年からの飛騨市内での民俗誌調査・実験考古学の展開と題しまして、山田昌久

様よりご講演いただきます。山田様は30年来宮川をフィールドに研究をされ、調査を記録してもらいました。その調査の実績を飛騨市に寄贈いただけることにもなっております。それではよろしくお願いいたします。

1995年からの飛騨市内での民俗誌調査・実験考古学の展開

山田昌久氏（東京都立大学）

最初に入ったときに色んなことを教わった方々、お会いできない方もたくさんいらっしゃるんですけど、本当に僕らが聞くと素直にみんな答えてくれて、分け隔てなく僕たちに向かって話をしてくれた方々が多かったのが、僕が飛騨に毎年通っている、今も通っているということになっているんだと思います。

今日のお話は、実はなかなか今大変な時代で、日本の村がこれから先どうやって続いていくのかということを考えると、村がなくなるということが日本の中であちこちで起きています。それは地域の文化がなくなったり、地域のお祭りがなくなったりということなんです。それをなんとか少し残そうという動きもあるけども、それが本当に20年後、30年後に続けていられるかどうかということを、正直言うと、多分皆さんも難しい部分があるなということには分かっていらっしゃる方が多いんだと思うんですね。

その中で今日僕のキーワードはここです。大きな社会と自分たちの社会。僕たちが村の中で、村の中の人たちと一緒に過ごして生活をしていた時間というのが、今なかなかもう続けられなくなっていると考えられます。そうすると村の暮らし自体がなくなるし、考古民俗館にある民具類も、考古学の遺物と同じように何に使ったか分からない人々がこの地域で生活する時代が、多分30年後40年後にはあるんだと思うんですね。

それをどうやって続けようか、なのか、もっと違う新しい暮らしを探そうかということが、実は本当に大事なことで僕らは思っていて。自分たちの社会というのが、日本の国の大きな国の中の色んなこととは繋がってはいるけども、そこに全部飲み込まれていくんじゃない社会が大事なと思っているということなんです。

それは、僕自身が1974年に神奈川県で、民具を国の有形民俗文化財にした最初の第1号が、三浦半島の漁村の民具だったんですけども、その民具の図を描くのを全部僕がやって、重要有形民俗文化財の第1号の報告書の実測図を僕が描いたということがあります。その図が実は、僕がそれからやってきた考古学の木の道具の図とか、そういったことにものすごく役に立っていて。そこで考古学の遺物を見ていくと、形はきれいに図化されていて、分類されて、これが古くて、こっちが新しいとか、そういう研究があるんだけど、これはどうやって使って、これを使うことで、1本の木が何分で切れたのかなんていうことは全く分からない。それは民俗調査だったら、山に入っていて、春木山でも、炭焼きでもやっている人に聞けば、こんなナラの木だったら、鉄の斧でやれば5分ぐらいで切れちゃうよとか、そういうことが聞けるのに、考古学の資料は全くそういう情報がない。だから考古学ってかなりインチキで、狩猟採集の経済と、農耕の経済って、2つの経済にしか区別ができない。10人の村でとか100人の村で、こういうような人たちがやっている経済っていう。本当は経済って数字が大事なのに、何も数字を使えなく、考古学者は経済という言葉で何か説明しているんですね。それが何か歯がゆかったり、何かおかしいと思ったのが、私の研究の始まりでした。

それで民俗史の研究と実験考古学っていう形で、考古学の資料をどうやったら生活レベルの具体的な道具として、これでどうやって竪穴住居が建てられたのかとか数値化しないと、縄文時代も弥生時代も古墳時代も奈良時代も竪穴住居はあるんですね。けども全然作られる時間が違ったり、効率も違うんですね。そういうことが何も議論できないまま、考古学者は縄文時代の説明をしたつもりでいるんです。こんな考古学はダメだなんて思ったんです。

なぜかというと、僕たちが考えている歴史というものが、エジプトの王朝の歴史とか、中国の漢帝国の歴史とか、みんな本当は王様の記録だったりしたものが、フランス革命の後に市民の国が生まれて。その市民の国が時系列を遡って辿ることが歴史ということに変わったんですね。だから世界中の国がみんな自分たちの国の歴史ということを考えるって、これ正直言うととっても変なことをしだしたんです。

本当は中国だって、モンゴル帝国は、もうモスクワのすぐそばまで攻め入って、あるときユーラシア大陸ほとんどが元の領域だった。そうすると同じ土地にずっといた人々を縦にずっとつなげる歴史って、本当はフランス革命の市民の国としてはとても大事なんだけど、実はただ積み重なっていたその地域の活動をつなげちゃうという役割を果たしちゃったんですね。そこが19世紀からの歴史の大きな課題なんだというふうに思います。

そのときに実は考古学はすごく役に立っているんですね。19世紀から20世紀にかけてヨーロッパでは考古学の学会がたくさん作られました。市民の国ができたから、その土地の遺跡を調査して、その土地の核をずっとつなげていくという歴史になった。考古学者ってその土地の歴史を調べるというのも重要だし、時にはエジプトに行ったり中国に行ったりして、世界の様々な地域の生活を記録するという形になったので、考古学って実は近代の国の歴史の政策にすごく活躍したというか、利用された部分があるんです。

問題は日本の国の歴史って、奈良時代、飛鳥時代の前に、日本は古墳時代も弥生時代も縄文時代も全部日本史なんです。でも隣の韓国に行くと、統一朝鮮という国ができる前は3つの国に分かれていましたよとか、自分の国がずっと一つの単位でまとまっていけないんです。中国に行っても、いつ中国っていう概念、中華っていう概念ができたのかっていうのを考古学者はいつも考えています。新石器時代に中華っていう概念がいつできるのかっていうのが考古学者の課題なんです。決して日本の縄文時代みたいに、縄文文化日本だなんて言ってないんですね。そう考えると日本の歴史が戦後にかなり独特な形に変わったっていうことがあるんだと思います。

だってね、昭和19年まで、大森貝塚にいた人たち、縄文の土器を使った人たちは、人を食べていたってことが報告されているんです。でも日本人じゃないから、先住民の遺跡だったから、それを日本の人々は決して怒らなかった。アメリカから来たモースさんという人が東京の貝塚にいた縄文土器を使った人々は人を食べていたよって報告書を作っているのに、日本人は自分のことじゃなかったんです。

だけども戦後になって、縄文時代は日本の中につながるものだというふうにされたんですね。そしてあらは日本人につながる人々が人を食べていたのか、ということになるんだけど、そうは全然誰も考えていないという問題があります。これがたぶん歴史ということをやっていると国が考えるということなんです。

一方、飛騨の自分たちの土地の、自分たちの地域の、自分たちの社会を考えるっていう、本当は日本史とは関係なく、飛騨の歴史があるんだと思うんですね。それを、日本の歴史は縄文土器を含めて全部日本史だから。飛騨も日本史だっていうふうな形で考える。

実は今日午前中に林さんが話された『ひだびと』っていう中で、東大の先生が縄文土器の研究をしているのに対し、ここの飛騨に住んでた人がもっと人間の文化とか社会の話をしてほしいんだ、するべきなんだっていうふうに言って、飛騨の人々は、日本の縄文文化の中というよりも飛騨でどんな生活をしたかということを知りたいっていうことを考えた人がいたんですね。東大の先生に対抗してそういうことを言うような、飛騨にはすごい偉人がいたっていうことなのかもしれません。

だからそういうことを考えると、地域の文化は国のものじゃなくて、地域のものだから、地域をどうやってつなげるかっていうことが地域の文化を考えるんだっていうことなんだと思います。

大学の教員なので難しい話が出てきてすいません。具体的には、考古学者は戦後には、縄文人は厳しい自然の中で歯を食いしばって頑張ったって、縄文時代を描いているんですね。ところがバブルの時代になると豊かな自然に囲まれて、すごくいい生活をしていたっていうふうに縄文時代を説明しているんです。21世紀になったら、環境問題が出てきて、地球の温暖化だとか廃棄物の問題とか出てくると、縄文人は自然とうまく付き合って共生していたんだって。こんないい加減なことを、ずっと変えていく考古学者は信用できないですよ。だけどもそうやってきたんですね。縄文人って一体どんなことをやった人なのかっていうことが本当にこんなふうに目まぐるしく変わっているんです。

じゃあ縄文人といっても「飛騨の人たちは縄文人なの?」「縄文文化って東北の人たちと九州の人たちもみんな縄文文化なんだけど」と言われてるんだけど、本当にそれは同じ文化なのかっていうことに対して僕は20年前に論文を書きました。縄文弥生時代、縄文弥生幻想からの覚醒っていう論文でした。それは多分縄文文化っていうのは、地域の中に村ができて、そこでお父さん、お母さん、じいさん、ばあさん、子供たち、未来とか、そういう自分たちの集団が、続く流れを持つ集団なんだっていうことが自覚され始めた段階なので、その時からだんだんと地域の文化というのが出来上がってきた。日本が一つのところから地域が分かれていくわけじゃなくて、地域の中でだんだんと自分たちの地域の文化っていうのが出来始めるんですよ。だから縄文時代の縄文土器を見ると、最初の8000年ぐらいの間は、九州の土器の模様も東北の土器の模様も、同じなんです。ところが村を作って、その地域の生活が、繋がりが、うまくつながっていくと地域の模様が出来始める。だから縄文時代にこそ本当は人間が社会を作っていたんです。だから本当の意味で地域のことを考えるのは縄文で、もしかしたら飛騨のことを考える時の縄文って言うてるのは、飛騨の地域に人がどうやって社

会を作ってきたかっていうことを考えるためのものなんだと思うんです。決して日本文化ではなくて、飛騨の地域とか、中部高地の中の一部の地域っていうような形で考えなきゃいけない。それが本当は考古学のやるべきことだったんです。

弥生時代も同じです。お米を作ったから弥生時代だって日本の考古学が説明してます。でも九州の人たちは、中国に人を送って、中国の王様から金の印鑑をもらって、青銅の祭祀器をもらって、という風にして、中国の帝国に人を送って、その帝国の中の一部だっていう風にして、朝貢して柵封されているんですね。

つまり弥生文化って言っても九州の人たちは中国の社会に入っている人たち。でも飛騨の弥生文化ってなかなか難しいけども、東京の弥生文化でもいい。弥生遺跡がある東京でもいい。それと九州の弥生は全く違う。社会も違う。文化も違う。ということなのに、日本の教科書では弥生時代、日本が一つのお米を食べた時代っていう風に説明してるんですけども。これも多分考古学者がこうやって言って日本文化を一つにしちゃっているんですね。

これは第二次大戦の後に登呂遺跡が見つかって。あ、田んぼがある。お米を食べていた。木で作ったくわやすきがある。これが日本の文化なんだっていう風に発見があったので、弥生時代は日本のお米を食べる文化の起源なんだっていう風に一つにしちゃったっていうところがあるんですね。この辺の前置きの話はこの辺で終わりにしましょう。

もう一つは、物の研究、道具の研究っていうのを、私は若い頃に、これは何に使ったんだっていうことを人に聞いて、これは魚を捕る網だけど、何の漁の時の網なんだとか。磯で貝を起す鉄の棒があるんだけど、これは磯場で貝を起す道具だっていうことがみんな聞いて分かっている。でも遺跡から出てくる道具はそんなこと全く分からない。細長い棒がありますよとかいうだけで、遺物の形で種類を分けてはいるけども、それがどんな道具か分からなかったんですね。

それでもって私は実際に道具を作って、田んぼを作って、お米を作ってみたり。斧で木を切って重機を作ってみたり、丸木舟を作ってみたりっていうことをやることで、縄文時代の経済、技術力はこうで、弥生時代の技術力はこうだっていうことを考えたいと思った頃に実は宮川に入って民俗の調査をしたっていうことなんです。

例えば弥生時代に田んぼに入るための木の板があって、田下駄って呼んでます。民俗の先生はこの田下駄が、泥がある深い田んぼに入るときにこれを履くんだっていうふうに報告してるんですけども、大嘘です。こんなものを履いてぬかるみに足を入れたら、10センチも下にめり込んで引き上げられないです。

だから田下駄が湿田っていう水が多くてぬかるみが深くて腰まで入る田んぼに入るためにこれを使ったんだっていうことを、考古学者は民俗学者の話を受けて、遺物で田下駄、これがあるから自然なんだって言うんだけど、多分これインチキです。これ今履いているのはですね、魚津さんっていう京都大学の考古学で博士を取った人なんですけども、その人と今田んぼに入って、いろんな米作りから、田んぼのいろんな仕事を復元してやってるんです。そのときにこの田下駄は、葦原を刈り取ったときに、葦の刈り取った茎が出っ張ってるところに裸足で入ったら怪我するんですよ。その上を歩いて、田んぼにすので根っこを掘り出すときに、これ履かないと怪我するんですね。だからこれはスパイクのような、スパイクっていうか、足をガードする道具ということになります。

そんなことをやってみると道具っていうのはどんなものかなっていうことを考えるんだけど、日本の弥生時代って小さな社会なんです。さっきの大きな社会、小さな社会に戻ります。中国のお米を調整する技術っていうのは、これ風を送って、脱穀したもみがらとか、ぬかを飛ばす道具があるんです。中国は大きい社会なので、多分これをずっと踏んでる人、中国では農業奴隷っていう言葉は今あんまり使わないけども、多分この人は一日中ずっと足で踏んで、お米を調整して、それを中国の都市の社会の人たちが個別に調整するんじゃなくて、みんな一括したものを食べるっていう社会になってる。だから中国はもう2000年前に、今ここに入っている唐箕とか言ってるものと同じような道具を使って、お米を加工しているんです。

ところが日本の社会は、杵と臼で、これ餅つくんじゃないんです。杵と臼で米を玄米にしたり、脱穀、脱粉っていう作業をしてお米を食べるものにするんだけど、一回ごとに一つの家族が、一回ごとに米を調整しているんです。これは日本のこの宮川の地域の人々はどうやってやったかっていうと、谷川のところに築屋を作って、水の動力で築いていましたけども。それも一軒ごとに米を調整しています。米を食べられるようにしています。だから一軒一軒の食べ物を一軒一軒で作ってた社会だったんですね。

そう考えると日本の弥生時代っていうのは、お米は作ってるけども、中国のような都市社会じゃなくて、多分個別の家族ごとでお米を加工して自分たちで食べる分を毎回作ってたっていう社会ということになるわけです。

日本の考古学者は一生懸命弥生時代のお米を調整する技術を考えようとしています、これはベトナムですかね、アルミホイルの浅い皿を作って、ぐるっと振り回すと遠心力でお米とこうやって分けられる、分かれるんですよ。これで調整をしているっていうのは実は日本の弥生時代にもあるんです。だからこの実が出れば、米を白米にする技術があったっていう風に考えるのが考古学者なんですけども、こんなものなくても分離することはできるんですね。多分個別の家ごとに一回一回を作っていることは、現代とは違う色んな在り方がどうもあるんだらうということになります。

これは田んぼでお魚や鳥やタニシを僕たちの実験田で取っているところの様子です。多分弥生時代に水田が広がると、こうやって水田を水を抜くとタニシがわーっと一面にある。休耕田でフナを春から飼っておくと、フナのうんちで田んぼの土に栄養ができて、そのフナを秋に取れば 40 キロ近いフナが手に入ります。

こんな風に弥生時代の人々はすごく合理的に生活していたのに、日本の弥生時代の研究はお米を作っていたということしか言っていないんですね。考古学者かなりインチキです。

中国は漢の時代にこうやってタニシを田んぼで取っている絵があったり、魚を飼っていたり、鳥を取っていたり、そういう絵があるので、中国の田んぼではもうお米だけでなくタニシも魚も鳥も利用していたということが明らかなんです。だから考古学者が反省しなきゃいけない。狩猟と採集の間には、あなたの思いも及ばぬことがまだまだあるのだから。僕はこれ植生史学会という学会で発表したんですけど、これが実は縄文、弥生時代の実態なんです。

さて宮川に入ってきます。

一つの家到一个の家族が住んでたので、この飛驒の宮川でもみんな屋号があって、その家は子供が継ぐだけじゃない社会がずっと続いていたんだと思います。それを明治維新の時に、全部の家に名字を与えて、それでその家を持続させようとしたんだけど、この令和の今、もうそれが続かないことになっていて。お寺のお墓を守る人もいなくなっちゃってるっていうのが日本中で起こっています。

宮川では村の中の家にはもう人が住んでない家がどんどんできてきています。多分これは、核家族がずっと続いて、その村の家をずっと続けていくっていう風に考えた明治の国の考えがやっぱり合理的じゃなかったということです。縄文時代の人、あるいは中国やロシアの石器時代の人みんなこうやって大きな家がたくさんあったり重なって作っています。こういう生活っていうのは村の中で土地の所有権とか相続権っていうのができて、それを代々そのエリアで 3、40 人ぐらいの大家族が生活をしていたっていうことになるんですけども。もしかしたら日本の社会ってこの合掌造りの村、家っていうのも、おそらく核家族じゃなくて、すごく大人数の大人の男性とか女性とか子供がいるような家族が、実は村を守ってきた、続けてきたっていうのに、明治時代にみんな一夫一妻制で核家族にしちゃった。これが、もう実は破綻しているのが日本だということになるわけです。

で、宮川の話。これも大変だ。堅穴住居に住んでいるのは血縁がなかったとか、大人と子供の墓を調べたら、お父さんと子供じゃなかった、お母さんと子供じゃなかったっていうデータが今集まりつつあります。そう考えると、大家族の中で、決して自分の子供と一緒に住んでるんじゃなくて、大きな単位で生活していたってことが言えるということですね。

さて宮川の話、どこだっけ。あれここじゃないのかい。あれ宮川の図がないぞ、あれれれ、困ったね。このスライドじゃないってことですね。あ、これ水田で鳥をとっている様子だ。ちょっとこれ違う。宮川村のやつがどうしてないの。あれ、終われないんだけど、これ。

じゃあ今出るまでは言葉でしゃべります。

この資料集を見てください。この資料集の 24 ページ、ここにあるのが宮川に入って毎年宮川の村の人たちに話を聞いたり、考古民俗館で道具の研究をした報告書がここにこれだけあります。本当はあと 2 冊あるんですけども、こうやっていろんな大学、北海道大学から九州大学まで人がいましたけども、いろんな人が集まって宮川で毎年 10 日間から 2 週間調査をしました。

そこでやったことって何かっていうと、26 ページ 27 ページを見てください。山仕事で春木山だったり、炭焼きだったり、いろんな仕事ごとに道具が展示されています。この道具を見ると、同じノコギリや、同じソリや、いろんなものがいろんな仕事に使われているんですね。これを見ると僕たちはこれは何に使うんだっていう風に言ってた考古学のモノ研究が、この場合には同じものが別の仕事にも使われるとか、そういうことがあるっていうことがありありと分かっていった。考古民俗館で展示

が仕事別に展示がしてあって、そこに斧もあるし、色んなわら細工もあるし、編み物もあったりしました。それを僕たちは調べることによって、昔の宮川の暮らしていうことを明らかにできたらいいなって思って入ったのが、27 ページの種蔵っていう集落です。

そこに入ってまず集落全体を測量しました。どの家がどこに畑があったり、山の奥の方までずっと調べて、どんな村の場所で、どんな人がどこで作業してるかっていうことを調べたり。どここの家はお寺さんが何宗で、どここの家はどこから奥さんが来たかとかそういったことを調べました。

家の周りのところの田んぼや畑があって、そこでお米なんか作ることもあるけども、基本的にはこの山の奥に焼き畑をしたりして、生活をして。これは種蔵ではあぜちさんという人が、この方位の図が書いてあるところ辺りに焼き畑があって、そこで豆とか雑穀を育てた後に、最後に栗の木を植えましたっていう取材をしました。なぜ栗の木を植えたのかって言ったら、それは自分の家を建て替える時の木材にするためなんだっていうふうに話をしました。つまり土地の利用って、一つのことだけじゃなくて、焼き畑が終わった後に、そこで栗を育てて、2、30 年したら自分の家の建て替える時の木材にするんだっていうことを、自分の里山の中で行っていたということがわかるんです。

つまりよそから木材を運んでくるんじゃなくて、一番最初の大きな社会と小さい社会っていうのは自分の生きてる範囲で、自分の世代の中で時間が責任が負える中で、里山の循環があって、それを使っているからこそ継続的に村を続けられていたんだっていうふうに考えたわけです。それだと人口が増えていって村が多くなったら、里山は足りなくなってしまう。そういう暮らしがあったのが、この宮川の地域に入って、この村がどのような仕組みで村を続けていったのかっていうことを私たちは調べていったわけです。そんなふうにして宮川に入って生活を調査していったら、今日のいろんな話の中で、たぶん森内さんの言っているような資本主義とは違うんだけど、自分たちの村、自分たちの社会の中で、ずっと循環的に生活ができる社会を続けてきた日本が、そうじゃなくて、農協に米を渡して、日本中に流通させてっていうような社会になると、自分たちの村の生活で事足りていた以外の仕事をするようになってしまった。

そこが多分、よりもっと便利なところに行って生活しようということも起こってくるし、この社会の中でずっと続ける生活じゃない生活に、実は今私たちは舵を切っちゃってるんだと思うんですね。そういう点で実は、考古資料、民俗資料をこれからどうやって見せるのかということは、実はもう民俗資料も使ったことがない人たちがあそこに行って、自分たちの文化なんだ、自分たちの伝統なんだっていうことがもう難しくなってきたので、もっと違う活用法を考えなきゃいけないんだというふうに思います。地域に残った様々な生活の証拠でもあるので、それは決して捨てるということでない選択が必要だと思うんだけど、あれを使ってこんなことをしたんだよということを語るおじいさんおばあさんもいなくなってきたので、あの道具を使ったことのない人たちがあの道具を見て、昔ここでやったよっていうことだったら、縄文土器と同じですね。縄文土器と石器と同じです。だからもう民具は考古学の遺物と同じになったんですね、なるんです。

これをどういうふうに止めるかじゃなくて、多分これをどうやって自分たちの地域の文化として考えるかとか、そういうことを本当は展示をしたり発信をしたりする必要があるんですね。だから今日の小学生の発表もすごく面白かった。頑張ってやってくださったと思うけども、それも今はまだできる、そういうことを聞いてできるけども、20 年後の子どもたちがこれを聞く大人がもういないとなったら、どういうふうにこの飛騨の宮川の歴史を考えたり文化の独自性を考えたりっていうことをするかっていう、そういうような発信の拠点に博物館があるんだなって思います。

だからもちろん日本中へいろんな発信をすることも大事だけど、実はやっぱり地域の人々の中で自分たちの文化をどうやって進めていくんだっていう、そのデザインこそが博物館を守ることになるんじゃないかなって思うので、今日のパワーポイントがなくなって困っている僕の慌てた話で終わるんですけども、宮川でぜひ現実的に人口ゼロになる集落っても出てきてますし、それをどういうふうに村の形を考え直して、どうするかっていうことをちゃんとやっていかないと、逃げていてはできない話だっていうふうに思います。

すみません、こんな話でごめんなさい。今日は私の話はこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

【拍手】

司会：

山田様ありがとうございました。続きましてトークセッションに移ります。今日 1 日シンポジウムを通して、最後に「資料との関わりは。そのための活動を知ってもらうには。」というテーマで

トークセッションをしていただきます。

今から少し会場の準備をしますので少々お待ちください。それと今のこの準備をお待ちいただいている間に質問用紙を回収いたします。お近くのスタッフに用紙、書かれた方はお渡しください。

トークセッション

資料との関わりは。そのための活動を知ってもらうには。

三好学芸員：

そうしましたら、準備お待たせいたしました。ここからは司会を交代して、私、三好のほうでご発表いただいた先生方に聞いていきたいなと思っていますので、よろしくお願いします。

今日はじめに大きな全体の流れとして、野口先生に未来へ向けてというようにところを話していただいて。林先生に当時 30 年前に建てた頃というようにお話を聞きました。実際、同じような地域で人口減少が進むという飛騨市の抱える課題を、すでに乗り越えられようとしている事例として、福島県の只見、宮崎の椎葉の事例を、新国さんと森内さんからお話をいただきました。そもそも資料、宮川で調査に入った理由はどうなのかというようにところを、最後に山田先生に総括いただきました。

そのような流れでお話をいただいたというのが、今日の流れでした。皆さん、分かっていたいただいているかと思います。大きくうなずいてくださいましたね、ありがとうございます。というように中で、まずご発表の先生方同士で、こういうところを深く聞きたいなとか、ここちょっと疑問に思ったなみたいなことを、教えていただきたいなと思います。よろしくお願いします。

山田氏：

忘れちゃったかもしれない。

三好学芸員：

先生方が忘れていたら、こういう流れだったんだって分かってなくても仕方がないですよ。どうでしょう。あ、森内さんありますか。

森内氏：

野口先生の 3D のデジタルアーカイブの件が、実は椎葉民俗芸能博物館も今年からデジタルアーカイブを進めようという真っ最中なので、すごい素晴らしい事例を聞いたなと思って感動していたんですけど、民具の 3D 化はどういう展望があるんでしょうか。私は奈良の事例とかも生まれて、同じ形のクワでも 10 個あったら 10 通りの擦れ方をしていたりとかすると思っていて、その擦れとかが、例えば 3D になるとより分かりやすかったりとかするのかなと思いつつ、写真でもいいんじゃないという気持ちもあり、そこらへんについてぜひ教えていただきたいです。

野口氏

ありがとうございます。ちょっと専門的な話になってしまうんですけども、例えば加工の工具痕なんかはきちんと出ます。それから特に民具は工業製品ではないので、一点一点ねじれ具合とか太さとか微妙に違ったりすると思うんですけども、今は考古学と民具をハイブリッドで研究しているチームが出てきていて、その 3D にした形状を工学的な解析、エンジニアリングの解析をすると、どこに力がかかると折れやすいとか、あるいはそれを補うためにどういうところで形をうまく使っている、木取りをしているみたいなことをやり始めているのは出ているんですね。

これはやっぱり写真でできないのかというと、写真じゃ無理なんですよ。それから従来の平面の図と断面でも、解析のプログラムがそれでは処理できなくて、やっぱり 3D なんです。ということは間違いなくあります。

山田氏

僕が出せなかった図の中にあるんです。考古民俗館の斧の柄とかいろんな道具の柄に、真っ直ぐじゃない柄がたくさんあるんですよ。で、曲がりを利用した民具っていうような報告をしたことがあって。それは曲がることによって打ち付けた時のショックを吸収したりすることができるんですよ。かんじきだってあれは輪っかにしてるんだけど、あれ四角く作っちゃったら角とかが折れちゃったりするので、湾曲した丸みがかかった力を逃がすような役割も果たしているんです。その写真のスライドがなかったんですよ。

実は本当に考えられていて、今の民具でも真っ直ぐな柄をわざとつけないで反ってるということによって、大きな力で打つことができるとか、違う方向からも作業ができるとか、そういうような民具のスライドが実はありました。

野口氏

あとちょっと1点付け加えさせていただくと、民具じゃないんですけども、多分皆さんの古いお宅の中には、曲がり木をそのまま建材にするのが結構あると思うんです。そういうものも今後復元していくときに、材木を削って曲がり木風にしちゃうと違うんですよね。だけれども立て直すときにどうしても傷んでるから変えなきゃいけないというときに、実は竹中工具店さんとかですね、そういう残って使える部分を3Dでデータベースにすることによって、その建物には使えないけど、別の建物にちょっと削って小さくならしたらそれに当てはめられるみたいな使い方をしようというのも始まっています。

新国氏：

ぜひ聞きたいのですが、それは膨大なデータ量となりますよね。それらのサーバーの維持費用と、今野口先生がやられていることを飛騨市でやれば、これはもう半端ない手間とお金がかかると思うのですが。これから将来どうしたらよろしいでしょうか。

野口氏

まず、担い手については、10年前は本当にソフトも機械もめんどくさくて、普通、皆さんやっってくださいって言うてもできるものじゃなかったんですが、今本当に簡単になってきているので、飛騨市の場合は4年前から一緒にスタートして、もう何人もの職員の方が自分ではなっています。問題はそのデータを取っておくこと。デジタルデータって形がないから、実物のように場所を取らないからお金がかからないと思われているんですけど、コンピューターをやっている人は分かるんですけど、置き場所にもお金がかかるんです。電気代ですね。これは今後の課題で、一部に、今日もお話ししましたが、デジタルか実物かっていう言い方をするけども、デジタルにしたら安くなるっていうことは、基本的にはあまりないです。その種類が変わる。場所代、土地代が、電気代に変わるみたいなことなので、ここは正直、私自身としては市町でどうこうなんて言っていると行き詰まるので、ここはちゃんと国が日本の歴史や文化ということで、きちんと予算付けをしていかないと、将来は続かないかなと思っています。

林氏：

曲がった持ち手とか、僕も前から気になっていたんですよ。山田さん、他に曲がった意味って思いつくものありますか?これ、こんなのおかしいじゃんっていうのが実は意味があるって。

山田氏：

例えば農具の中で、唐鋤って、田んぼや畑の土を動かす道具。あれも前に伸びる部分ってみんな曲がってるんです。あれ真っ直ぐだと、引っ張ったときの方向でここにかかる負荷が違っちゃうんで。曲げることによって、色んな方向からの力をうまく吸収されたりもしているんで、民具の牛や馬が使う鋤も、その部分だけは曲げて作っているんですよね。あとのものは真っ直ぐに作ってもいいんですけども、その部分を曲げた方が、引く方向を自由に換えられる部分が高くなるんですよね。そういう道具の話を申し訳ありませんが、できませんでした。

林氏：

ありがとうございます。僕も何でこれ曲がってるんだろうとか、同じ道具でも持ち手で真っ直ぐなのと曲がってるのあるじゃないですか。あれすごい気になって。たまたまかなと思ってたんですけど、郡上の明宝で、トチの実を採集してたときにある方に話を聞いて。山仕事に毎日行くと、そのときに、色んな種類の木の曲がったのとか、真っ直ぐなのとかあるのを、もう全部覚えておく。それは、この道具のここに使えばいいっていうのを、毎日狙って覚えておくんだと。で、その道具が壊れたり、次に新しいのが必要になったときに、切ってきて使うんだって、すごい話を聞いて、それを今思い出したんですけど。以上です。

山田氏：

そういうようなことって、みんな普通の人が思ってたのに、今、そういうことを考える人がいないですよ。本当は自分が使う道具をこうやって使いたいから、この柄が欲しいとか、そういうのが普段の生活の中で、皆さんが考えて山を歩いていた時代が、多分もうなくなってきてるので、道具はホームセンターで買ってくるとか、そういうようなことでやっていると、本当の道具の使い方とか、もっと多機能にいろんな加工方法を持って、操作方に変えて使うといった、昭和の道具使いみたいなものが、もう今はないんだと思うんですよ。

ホームセンターは悪いわけじゃないんだけど、鍬や鋤だって自分のサイズに合わせたものを作ってたのに、今はホームセンターで買くと、全部同じ長さの道具に体を合わせなきゃいけないんですよ。

そういうことが本当は、つい数十年前の日本では、みんながそれを分かっている、自分に使い勝手がいいものはこうだっていうふうにして作業していたのが、そうじゃなくて、工業製品に自分を合わせて生きる時代になったんだなって思うんですよ。

三好学芸員：

ありがとうございます。だいたひ民俗文化財の調査とか記録をする意義に関わるようなお話をいただいたのかなというふうに思います。トークセッションみたくなってきました。ということで、会場からいっぱいご質問をいただいています。それに、せっかくの機会ですので、登壇者の先生に答えていただきたいなと思っております。

まず、新国さんに2件来ています。ご質問いただいた方、ありがとうございます。まず、只見方式は他の地域でも可能か、この場合は飛騨でも可能なかというようなご質問が来ています。

もう一人。おそらく始める時が大変だったと思うんですけども、まず協力を得るのに苦労したことってあるんじゃないか。走り出すまでに。そのようなことは何だったのかなというようなことを聞きたいと。

もう一つは、きっかけ、協力を得るというようなきっかけは何だったのか。2つ半というか3つ質問が来ている形なんですけれども、よろしく願いいたします。

新国氏

よい質問をありがとうございます。只見方式のやり方はできます。文化庁から只見のことを全国に紹介していただいたので、これまでに北海道から九州まで只見方式のマニュアルを配っています。調査カードも、大きいカードと小さいカードも簡単に書けるということで、結構使ってもらっています。

マニュアルも、写真の撮り方から記入の仕方まで全部図示したものをつくって、最終的にはこうなるといふのを全部示しました。もし欲しければいくらでも差し上げますし、2年前に東京文化財研究所でやった講演会のレジュメにもそのままマニュアルが入っています。ネットでも引き出せると思います。ぜひ、やってください。

2つ目の、できますかっていうのは、それはもうたいへんです。うちは朝日郷土史研究会という歴史や民俗の好きな団体が10人くらい。あとは明和の民俗を語る会という明治・大正生まれのおじいちゃんやおばあちゃんの団体の2団体がありあました。その両方に声をかけてやってもらい、謝礼も払いました。35年前で1日3500円くらいです。大したお金ではないですが、少しずつやっているとやっぱり面白みがでてきて、それからいろいろな研究者が来て、おじいちゃんすごいなっていってくれて、その気になっちゃったんです。そのうち2つの団体が競争をはじめました。うちは今日100点やった、向こうは90点だっていうふうに。それでうまくいった。そのすべり出しをうまくやるのは、やっぱり担当者です。私もその担当をやって、1つ終わればご苦労様っていうことで差し入れ持っていったり、あとは中間祝いだなんて、すぐ宴会をやったりとか。そういうコミュニケーションをすごく濃くやったつもりです。あと文化庁の先生や博物館の先生も来たり、大学の先生もいっぱい来ましたから、そのたびに講演会や座談会もしょっちゅうやりました。そして続けてやっていると、だんだんみんなその気になってくる。視察がいっぱい来始めたら、おじいちゃん、おばあちゃんたちだってその気になっちゃう。えらいことしているという気持ちになって、意識も高まっていって。

きっかけ作りは、まず好きな人を見つけること、そして仕掛け。何回も言うようですが、その気にさせるアクションをする。すべて自分でやるとやりきれませんから、先生が来たときにちょっとこう言ってくださいとか、広報紙とか新聞に、おじいちゃんやおばあちゃんがこういうことをやっていますなんてことの情報を流します。そして最後はフィードバックすることですね。本を作ったら終わり、シンポジウムをやったら終わりじゃなくて、それらをいかに住民にフィードバックさせるかが鍵

かなと思っています。

三好学芸員：

ありがとうございます。今日も何らかの形で公開したいなと思いました。ありがとうございます。

引き続きまして森内さんにご質問が来ています。森内さんのお話の中で、飛騨市で言うと甲斐性があるという言い方をするんですけども、インフラの整備を自分たちですというお話があったと思います。その大事なのが、月1回の集会というようなお話があったと思いますが、コロナの時には、集会はどうされていたんですかという、その大事な会議がないと、どういうふうな動きになっていたのですか、というようなご質問です。

森内氏：

ありがとうございます。集会はやってた地区とやってなかった地区があったと聞きます。さっきも神楽の話の時にチラッとしたんですけど、大きめに分けて26の地区があるので、それぞれの地区ごとに、集会とかもやり方が違って、回覧板になっちゃってる団地みたいなのところも、もちろんあるんですけど、コロナにかかった人が出てないうちは、やってたっていうような地区もあったりとか。あとは若者は遠慮してくださいとか、村のよそによく出かける人は遠慮してくださいとか。なんか結構いろんなやり方で、それぞれに地区の皆さんでどうするか話し合っ、その時も方針を決められていたというように聞いています。

三好学芸員：

ありがとうございます。今の中のお話でも、僕もいつも違和感というか感じることもあるんですけど、やっぱり今日はみやがわ考古民俗館のことだから、やっぱり宮川でやるんだろうというようなことがあったり。でも飛騨市全体にかかる文化財のことは古川の会場でやったり、みたいなことがいろいろあるんです。一つの地域というようなことで、地域の人々で見直すという話があったんですけども、地域の捉え方は様々なのかなというふうなことを改めて思いました。行政という枠とか、住民の皆さんが思っている地域とは違うのかなというふうに改めて感じた次第です。

そのような中でなんですけれども、山田先生にご質問が来ているんですが、すごく難しい質問です。社会の流れが変化する中で、現代の人々が歴史を学ぶ意義は何だと考えますか？すごく深い質問が来ています。僕も地域のこともちょっと思ったところなんですけど、そのことも踏まえてお答えいただけたらありがたいなというふうに思います。

山田氏：

自分たちはどう生きるかということを考えるときに、やっぱり歴史って大事だなと僕は思っているんだけど、よく歴史の先生が、過去を知って未来を見るんだというようなことを言うんだけど、そんな歴史研究って本当にあるのかなと思ったりします。

例えば、僕たちが宮川村でバンバを調べるときに、今だったら市役所から除雪者が来て、自分の村の道路を雪かきをしてくれることが当たり前だと思っている。

でも、40年前の宮川の人たちは、自分の村の人たちがバンバを持って雪かきをしている。だから、これって歴史的に見ると、自分たちの仕事を行政に頼める時代になった前は、自分たちの村の道路は自分たちで除雪する。そういう時代が本来ずっと長く続いていたんですよ。

で、歴史というものが実は、そんなところも実は大事で、自分たちがやっていることが本当にどういう風にして続いてきたのかということを考えたら、バンバは実は鎌倉時代の遺物にもあるんですよ。雪かきのコスキっていうふうに東北の人は言っているんだけど、だから、各村で雪かきをするっていうような暮らしは、鎌倉時代の山間の集落はもうやっていた。

でも、私たちは今は市役所に頼んで、除雪車を出してもらおうということが当たり前だと思っている。ほんとは村の中で助け合っ、家の屋根を葺き替えるんだって、村の人々がみんな寄り合っ作業をしていた。それなのに、今だったらもう村の寄り合いで、縄を持ち寄ったり、茅を持ち寄るっていうことをしなくて、市の助成金でいろんな機材を買うっていうことになってます。だからそういった点で、自分たちはどうやって生きてきたのかっていうことをもう一回考える必要があるなと思うんですけども、ご質問の歴史っていうのは、もうちょっと政治史とかそういったことも含めての部分があるんだと思うんですよ。

で、実は 19 世紀の歴史哲学者ポンパーという人がいて、歴史というのは単に繋がっているわけではなく、単に順次起こっているんだというふうに言っていて。僕たちが全部自分たちの社会を時間的に継続して繋がっているんだというような歴史観をポンパーは否定しているんですね。

外国の人が歴史というのが決して繋がって継続しているものじゃないんだというふうに言っている人がいるんです。でも僕たちは自分たちの村は自分たちの子供や孫がやっぱりこの村に住むんだというふうに思っていた。今、村の歴史というものが未来も続くと思っていたのが、あれれ、子供はみんな東京に出ちゃうよとか、そういったことになってきている。そういう意味では村の歴史はどうなるかということ、子供の代では東京での生活がその村の続きの歴史なのかもしれないんですね。

歴史というのはその土地ですっと社会が続いていたものを整理することなんだといった、フランス革命後の市民の国の歴史みたいなものが本当はかなり無理があって。エジプトの新王朝は新王朝の歴史が語れるんだけど、中国の唐や隋の歴史というのも語れるんだけど、実は日本の地域の庶民の歴史というのを時系列で全部つなげるということ自体が、本当は違うんじゃないかと僕は思っています。

ただ、この飛騨の地域ですっと江戸時代、もっと前から続いていた人の営みがあるので、それがどうだったかということは知ったらいいんだと思うんだけど、それを歴史という言葉なのか、飛騨の文化とか、そういう形で考えると、飛騨の社会とかそういう言葉で僕は考えていった方がいいんじゃないかなというふうに思ったりしています。答えとしてちょっと不十分かもしれませんが、そんなふうに僕は考えています。

三好学芸員：

ありがとうございます。やっぱり一つ飛騨というような枠で僕たちのことを考えていくということが、自分たちのことを知るために必要なことのうちの一つなのかもしれないなということをお話を聞いて考えました。それをきっと繋げていくということが大事で、先生方のお話でもそれが出てきたと思います。

林先生に質問が来ています。学生による研究の内容の深さに驚きました。私もこんな活動を高校生のうちにもっと行いたかった。確かにすごい。質問は、学生さんたちの研究時間は週単位でどれくらいなのでしょう。

林氏：

ありがとうございます。私の働き方改革を心配してくださってると思うんですが。そうですね。これ、録画されてますよね。

三好学芸員：

言える範囲で。

林氏：

下校時刻は 6 時までで、その 6 時までの範囲でやってます。私ともう一人いますので、働き方改革もありますので、私が早く帰るときには、もう一人顧問がおります。

それと、フィールドワークは、これやってるんですね。だから文科系の部活ですけども、結構土日に行うことが多いです。実は昨日も飛騨金山でフィールドワークやって、関まで生徒を連れ帰って、それから私は飛騨市に來たんです。私は個人的には趣味の延長と言いますか、なのでそんなに苦労は感じないんですけども。そんな感じで、平日は 6 時まで。土日のどちらかにフィールドワークをやることのあるというような形なんです、そんなことでよろしかったでしょうか。

三好学芸員：

ありがとうございます。僕たちも働き方改革には気をつけようと思っています。

続きまして、継承にかかる問題で野口先生に質問です。体験というキーワードが何回も出ました。でもそれは自分たちが体験講座とかで体験した道具の使い方とか民具の使い方みたいなことよりも、調査など博物館の活動を体験として言っていると感じました。それらは今の働き方改革にかかるかもしれないですけども、限られた行政の体制でも博物館資料を継承していく手段になり得るのでしょうか。これは森内さんの民俗調査そのものが地域における歴史実践になり得るという言葉とも関連するかもしれませんというご質問をいただいております。

野口氏：

ありがとうございます。私自身は博物館で実務をしているわけではないので、ちょっと無責任な言い方になるかもしれませんが。率直に言って、博物館や文化財の担当者がどれだけ手放せるのかにかかっている。もうこれはこういう使い方をされたものである、こういう歴史的意義がある、これを絶対に教えたい、その体験をしたい、という手放せないで、自分の調査する時間、他の仕事をする時間、体験講座をする時間、どんどん時間がなくなっていく。

私が今日主に説明をしたのは、皆さんにお伝えしたかったのは、そうではなくて、参加者なり体験をする人が自分で見つけ出すもの。これは森内さんの例の中でも、遠野の方でも一旦途切れたものをアートとして評価する人がいたりというのと同じだと思う。この時に、それは昔の使い方と違うかな、そうじゃないんだ、それを直したいと思うと、そこに軋轢も生じるかもしれないし、説得するのに時間もかかる。さらにそのための材料を集めるのに調査しなきゃいけない。もちろんそういうことも、全部誰もが思うように自由にやればいいということではなくて、記録して残しておかなきゃいけないところもあるんだけど、その体験をしてもらうということを、全部コントロールしたいと思うと、それは本当に時間がかかる。

これはおそらく質問をいただいたのをさらに振っちゃいますけれども、学校の先生も同じじゃないかと思います。

林氏：

ブラックな部分をいかに解消していくかということなんですが、実は野口さんうちの活動に絡んでいただいてまして、やっぱり僕らも効率よく作業を進めていく必要があるなというので、実は昔ながらの僕らが習った測量法で石垣とか、お城の石垣ですね、あるいは戦争中の残骸とか、行政の力も借りながらやると、これはもう時間かかるんですね。生徒は楽しいんですけど、僕ら体力的についていけないとか、時間がかかる。ところが野口さんが3D スキャニングの方法をうちの生徒に教えてくれて。どうでしょう、僕らが数人で1週間くらいかかっていたのを、2時間くらいでスキャニングして、この前も山城一城、石垣全部仕上げたんですよ。

それから、あと ChatGPT、これすごいですよね。今、くずし字アプリがあって、無料アプリで。もちろん精度の問題があるんですが、くずし字アプリで読み取りができるんですよ。それをコピペして ChatGPT に貼り付けてかけると、かなりの精度で、有名な人物のものだけじゃなくて、例えばこの飛騨とか美濃のすごくローカルな由緒書きとか、そういうものもかなり正確に、しかも解説付きで、一説付きで出てくるんですよ。で、生徒はそれを検証すると。3年生、怒ってますかね。3年生、僕は一つ一つって。2年生、1年生、ふざけやがってとは言いませんが、羨ましいと。手測量をやった世代もいますし、一つ一つくずし字を読みながらやってた世代も、それぞれで大事なんですけど、時短になっている部分は、野口先生のお力も借りてですが、ありますね。あまりちょっと答えになってないかもしれませんが。

三好学芸員：

ありがとうございます。体験とかやり方が変わっていくということ、大人も子どもも一緒に学んでいるということなのかな。その学ぶことそのものが地域の歴史を記録することになっていくというようにお話をいただいたのかなというふうに考えます。ありがとうございます。

次が最後の質問です。森内さんに来ています。森内さん、山田さんのご発表は、歴史の捉え方を根本的に見直すことが提言されたということで、すごく深い言葉だなというふうに思います。それを山田先生のお話でもあったかもしれないですけど、見直していくというかデザインをというお話を、お言葉を使われていたかなというふうに思います。それを行う軸は、やっぱり一つの地域から自分たちの地域の歴史を見直すということになるんだろうということは分かったんですが、森内さんは民俗史をどこまで語り直しが許されると考えますか?ということでした。例えば、かなり前に刊行された椎葉村史と新しい民俗史との違いはありますか?というようなご質問が来ています。

森内氏：

ありがとうございます。難しい質問だったんですけど、椎葉村史の話で言うと、椎葉村史の初版は今の歴史資料から読むと結構ずさんなところもあって、網羅されていない項目もたくさんあるので、読み直しはぜひしてほしいというのと、椎葉村内では言いにくい話をすると、例に漏れず、山奥なので平家の落人伝説があるんですけど、それもあり歴史としては怪しい。でも村の方がめちゃくちゃその話を推していて、鶴富姫が住んでいた家もあって、平家の落人伝説をもとに平家祭りと言って、

最大時には10万人の観光客が来ていた祭りまで開催されていて、馬も引いてきて、農林振興課に獣医さんがいらっしやって、その方が馬の面倒を見れるので。そういう椎葉の全てのマンパワーを駆使してやっているお祭りがあつたりする。

そこで私がこの家系図の由来は怪しいですよって言って、その祭りを否定することはもうできないと思っているし、皆さんがこれが椎葉の歴史って言うならやっぱりそうと思って、私は一回真剣に受け止めるっていう態度をとろうと思って今日の発表をしました。

もう一つは、さっきの野口先生の話にも続くかなと思うんですけど、歴史と伝統の違いみたいなことも、もう少し話したいというか、地域で議論されてもいいのかなと思っています。特にそれこそ文化庁の MATER になったり、国の補助金、県の補助金取ってくる MATER になると、急に伝統の話になって、これは絶対揺るがしてはならないものだっていうような話になってくるんですけど、やっぱり歴史は変わっていくし、常に見直されるし、平家祭りは生まれる。飛騨にもきつとあると思うんですよ、そういうのが。歴史実践を大切にしていこうような行政の方針に、もうちょっと移ってもいいのではないかなと。山田先生と朝もそういう話をしましたけど。

三好学芸員：

ありがとうございます。どちらも大事な価値があると言っていたのかなと思いました。

林氏：

多分ね、高校で今やっている総合的な学習の時間って、昔と違って答えがない、正解がないことにチャレンジしているんですよ。昔はどんな試験もみんな正しい答えを出していくということが教育だったんですけども、自分でどうだっていうことを考えを作っていく。それが今、学校の教育の中で展開してきたので、本当は民俗資料なんかも、ここでやっている方式と、只見の方式、僕はすごく近いことをやったと思っているんだけど、どんなことをやってもそれが正しかったということではないので、こういうことをやってみたらこんなことがわかったという形がこれからは必要なんだと思うんですよ。そういう意味では、こういうふうに切り口をやったら、こんな歴史が描けたということもあるんだと思うので、多分答えは一つじゃないという。ちょっと危ない答えなんですけども、そういうことをちゃんと分かった上で、自分がやっぱり熱を持って自分はこうするんだって判断する人間が、どんどん若い世代に出てきてほしいなって僕は思っています。

森内氏：

どっちもあつたほうがいい話で、私もやっぱりどっちも地域の中にあつて、それが対話できているとか、どっちも並列であるのがいいなと思っていて。椎葉の神楽の場合も、この舞の型は絶対に変えてはいけな派と、もう自由にやるんや派と、この動画に忠実にやるんや派と、俺はこの先輩が好きやからこの舞を継承する派と、むちゃくちゃ流派があつて、それが全員許されているのが一番やっぱり健全やなと思ってます。

三好学芸員：

いいコメントありがとうございます。何となく継承に向けてのヒントを今いただいたのかなというふうに思いました。対話、ありがとうございます。といううちに時間が差し迫っております。クロージングにこのまま入らせていきたいと思います。

今日をご登壇いただいて、今トークセッションで何となく継承へのヒントもいただいたと思うんですが、最後、先生方から一言ずつ感想とかコメントをいただけたらありがたいなというふうに思います。まず野口先生からお願いしていいですか。

野口氏：

一言と言っても長くなったら止めてください。世の中の地方の民俗にあるような暮らしが変わってますという話が今日あつたと思うんですけど、実はこれ都市でも全く同じで、都市の方が早くに工業製品が普通になっていると思うんですけど、逆に私が小学校、中学校の頃というのは、もうとにかく勉強というのは暗記をする。言われたこと通りに答える。試験、大学入試とかももう一種類。それにはまらないと将来がないみたいな。ところが今、実は生活は画一化していくのに、学校の教育ってすごい多様化しているんですよ。

うち子供、男の子二人いるんですけど、上の子はルーチンがすごい得意。下の子はもうとにかく自由に、ルーチン大嫌い。もう両方どっちもそれぞれの進路を選べる時代になる。私が子供の頃だと下

の子はもう当然はみ出し者になんですけど。そういうふうに揺れ動いている。経済は画一化しているのに、今なんか文化とか学習は多様化になっている。そういう中で伝統というので、文切り型に同じものを続けるのが伝統なのか。変わることが伝統なのかという話の議論かな。

そこに加えて 3D は置いておいて、デジタルとかがどう入ってくるのかというと、今まで記憶、人の記憶とか書いて残したのでは、カバーしきれなかった大量の情報が今まで以上に残せる状態になっている。それはもう人間の脳を越えて、世界中のいろんなコンピューターとかネットの中に情報が増えていく。それを踏まえて今後また画一化していくのか、多様化していくのか。それも過去にこだわるのではなくて、未来がどう変わるのかを楽しむ方向で、過去の民俗や考古資料も受け継いでいったら面白いのかなと。以上です。

林氏：

学校現場の話になるんですけども、世間で考えられているより子供や若者というのは、昔の話、おじいちゃんおばあちゃんの戦争の体験とか、決して豊かじゃなかった頃の話というのをしっかり受け止めています。たとえば白川郷へ不特定多数の生徒を連れて行ったことがあるんですけど、そういう歴史に関心がある子ばかりではなく、普段あまりそんな歴史なんてという子たちが、昔の厳しかった時代の話をしっかり聞くんですね。そんな感じです。なので、そういった町に出る機会、博物館も増えて、それはどんどんあった方がいいなというのが僕の感想です。以上です。

新国氏：

今の世の中、すべてタイム・パフォーマンスとコスト・パフォーマンスで済まされてしまいます。効率化され画一化した世の中になって、モノはみんな単一化されてしまっています。だから、いまいちばん必要なのは、ダイバーシティという多様性を大事にして、それを引き出すことではないでしょうか。山国に住んでいれば、山はガソリンスタンドであり、ホームセンターであり、スーパーマーケットであり、薬局であったわけで、そのような山の役割を調査して掘り下げて、ストックして溜めていけば、いつかはその地域の宝になると思います。資料館とか博物館の役割は、いろいろな多様性を収集して記録し、それを広げていくことが使命ではないかと思いました。

森内氏：

改めて飛騨にお招きいただきありがとうございます。来る前に三好先生と山田先生とお話していたときは、飛騨のことはほとんど分からないことだらけだったんですけど、30 年を前に改革をしたいんだ、みたいなすごい熱い思いと、現状への危機感を伺っていたんですけど。来てみたら、私の前の小学生の皆さんの発表の方がすごい立派なぐらいで、もう私が喋ることはないと思って本当に恥ずかしかったんです。もうこのままでいいのではないのでしょうかと。

あと、私自分の働いている博物館にいてよく思っているのが、椎葉の場合はまた特殊な状況はあるんですけど、うちに博物館に展示しているものって、全部村の生活の中に今も残っているもの多くて、本当に貴重だなと思っていつも館内にいるんです。けど、館内には実は何もなかったりもするので、情報はあるんですけど、生きた暮らしはないので、ぜひ皆さん自分のまちを改めていろんな視点で歩いてみられたら、楽しいのではないかと思います。今日はありがとうございました。

山田氏：

私は今年も来年も飛騨に来て宮川にも来ます。以上です。

三好学芸員：

ではこのままクロージングに入らせていただきます。本当に最後に嬉しいお言葉ありがとうございました。いくつかキーワードをいただいたなと思っています。歩みと展望という題の中で、本当に僕も知らない開館当時のことを教えていただいたり、金山さんや林先生から。今、今後未来を目指すんだという視点で、未来に向かっていろいろ教えていただいたりしました。その中で価値であるとか、地域であるとか、もっと具体的な体験というようなキーワードをいただいたと思っています。

歩みを止めることなく、今度 60 周年記念シンポジウムを行いたいなと思っていますので、それまで皆さん元気にしていただきたいなと思っています。

山田氏：

あと 30 年か。

三好清超学芸員：

頑張りましょう。

あと今日本当に遠くから先生方にお越しいただきましてありがとうございました。とともに、実は会場の皆さんも市内の方が4割ぐらい、5割弱ぐらいなんです。あと遠くですね、西は和歌山、東は千葉から来ていただきました。本当に皆さんお集まりいただきましてありがとうございます。申し込み者がなかったらどうしようと思っていたので、本当によかったなと思っています。

60周年の時も集まっていたらと思います。ではこれで終わらせていただきます。ちょっと時間オーバーして申し訳ございませんでした。今日は本当にありがとうございました。

【大拍手】